まず、
話してみる。

コミュニケーションを
更新する3つの実践

目次

はじめに 02

PROJECT 01
アートプロジェクトの担い手のための手話講座 05

ABOUT 06
体制図 07
これまでの活動 08
座談会｜身体を動かすコミュニケーションを体感する講座づくり 10

PROJECT 02
TURN / Creative Well-being Tokyo 23

ABOUT 24
体制図 25
これまでの活動 26
座談会｜映像制作」を通じた、感覚の異なる他者との出会い 28

PROJECT 03
めとてラボ 41

ABOUT 42
体制図 43
これまでの活動 44
座談会｜「わたし」を起点にするアートプロジェクトをつくる 46

おわりに 62

「座談会」「はじめに」「おわりに」の映像はこちら
（Tokyo Art Research Lab YouTubeチャンネル 再生リスト）

はじめに

誰もが互いの価値観や個性を尊重し合い、ともに生きていく社会の実現を目指し、行政、企業、NPOをはじめ、さまざまな分野でアクセシビリティや情報保障に関する活動が広がっています。文化事業の領域においても、さまざまな身体性や感覚を持つ人々との協働が増えつつあり、あらゆる人が芸術文化を享受できる環境づくりへと動きはじめています。

公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京でも、こうした社会的、文化的動向に応答しながら、アクセシビリティや情報保障の在り方を検討し、試行錯誤を重ねてきました。さまざまな身体性や感覚があるということは、そこから生まれる生活様式や世界の見え方、そこに紐づく文化があるということです。アクセシビリティや情報保障とひとくくりに言っても、それぞれに合った方法や形式はさまざまで、ひとつの明快な答えや考え方があるわけではありません。だからこそ、企画づくりにおいてもさまざまな人々とともに考え、実験し、つくるというプロセスが重要です。そうすることによって、お互いの存在を認識し、尊重することがはじまるのではないでしょうか。

本企画では、そうした異なる視点を持つ他者と**「ともにつくる」**こと、そして**「わたしたち、それぞれの文化」**についてあらためて考えるために、アーツカウンシル東京による事業のなかから、特に「手話」や「ろう文化」、「視覚身体言語」に関わる３つの事例を取り上げました。

一つ目は**「アートプロジェクトの担い手のための手話講座」**です。この講座では、身体を使ったコミュニケーションを実践するレクチャーシリーズとして、参加者とともに学びの場をつくってきました。二つ目は、さまざまな“個”の出会いと表現を考えるプログラム「TURN（ターン）」が実施したオンライン企画です。その経験は「Creative Well-being Tokyo（クリエイティブ・ウェルビーング・トーキョー）」事業における文化施設職員に向けた研修映像の制作へと繋がりました。三つ目は、誰もが“わたし”を起点にできる共創的な場づくりを目指すアートプロジェクト**「めとてラボ」**です。異なる身体性や感覚世界を持つ人々とともに、コミュニケーションの在り方を考えています。

本冊子では、それぞれの事例について（1）事業概要（2）事業の体制図（3）これまでの活動（4）関係者による座談会という構成で紹介しています。

さらに、メインとなる座談会は、「冊子」と「映像」の２つの形式で公開しています。映像では、登壇者と手話通訳者が横に並んで手話の表出を行うなど、視聴者への見え方を想定しながら、収録現場の配置や画面構成を検討しました。また、映像には字幕をつけています。冊子では、座談会でのやりとりを臨場感のある形で表現すべく、レイアウトやデザインについても議論を重ねました。本企画は、わたしたち自身が培ってきた経験や知見をあらためて問い直す機会となりました。

３つの事例はいずれも、関わる人々との協働のなかで生まれた気づきや喜びを、大切に育んできました。これらの取り組みに共通しているのは、事業の進め方、つくり方から、自分とは異なる他者とともに探求しようとする姿勢です。こうした姿勢は、隣りにいる人々と「まず、話してみる」ことからはじまります。

活動の数だけ、新たな出会いがあり、その先に続く展開があります。しかし、その企画や制作に関わる担当者ならではの視点は、なかなか語られることがありません。わたしたちは、ここにある経験をもう一度掘り起こし、繋いでいくことにしました。それぞれの現場には、関わる人それぞれの切実さや課題感があります。それに向き合い、悩み、重ねてきた実践のプロセスをひらくことで、どこかで同じように模索を続ける誰かの参考となり、そこから新たな実践が広がっていくのではないか。そうした文化的な連鎖によって、世界は少しずつ変わっていくのだという期待を持って、この企画に取り組みました。

本企画を通じて、読者や視聴者のみなさまが「わたしたち、それぞれの文化」について思考を深めるとともに、今後生まれる新たな議論や活動をささやかにでも後押しできるものとなれば幸いです。

まず、話してみる。―― コミュニケーションを更新する３つの実践
制作チーム｜櫻井駿介、小山冴子、嘉原妙、齋藤彰英

アートプロジェクトの担い手のための手話講座

ろう者の感覚に触れながら、
身体を使うコミュニケーションを体感する講座

ABOUT

手話やろう文化を体感し
発話に頼らないコミュニケーションに取り組む

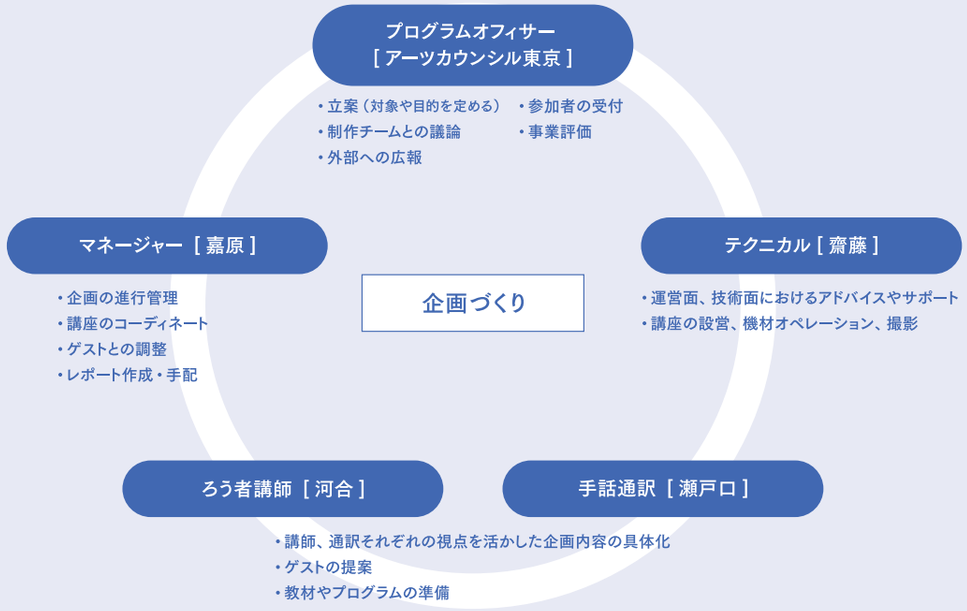
アーツカウンシル東京が実施する「Tokyo Art Research Lab（TARL）」事業では、アートプロジェクトの担い手となる人々に向けてさまざまな講座や勉強会の実施、研究開発や成果発表などに取り組んできました。その一環として2020年に開始した「アートプロジェクトの担い手のための手話講座」は、アートプロジェクトの運営に関わりながら、手話や身体言語を用いたコミュニケーション力を磨きたい人を主な対象とし、プロジェクトの説明やコミュニケーションを円滑に行う技術を深めることを目指しています。

異なる背景をもつ人々が集い、語り合い、ともに活動するアートプロジェクトでは、日々さまざまなやりとりが交わされています。プロジェクトの場や時間を豊かにしているのはそうした多様なコミュニケーションであり、目で見る言語である「手話」も、そのひとつです。相手の表情や視線、声の温度感、言葉の選び方、身ぶり手ぶり。一度そこに意識を向けてみると、一瞬のうちにさまざまなサインを受け取っていることがわかります。全身を動かしてコミュニケーションを交わすことに慣れるにはどうすればいいのか。手話やろう文化を体感し、発話に頼らないで伝え合う姿勢を身につけるための工夫は何か。運営チームで各回の企画を検討し、実施、振り返りをしながら講座を続けてきました。

初回は2020年、新型コロナウイルス感染症の拡大が危ぶまれるなか、オンライン形式での開催に挑戦しました。その後も全21回の映像プログラムの配信を通じて、いつでもどこでも手話の基礎や、ろう者と聴者のコミュニケーションの違いについて学ぶことのできる機会をひらいたり、指文字表の制作などにも取り組んでいきます。対面形式の講座は、参加者どうしであらためて「目」で見る、全身で伝え合うことを意識してみるワークショップを組み入れたり、実際の現場を想定したロールプレイ、ろう者のゲストを招いて日常での出来事や体感を聞き合う場をつくったりと、さまざまな場をひらいています。

身体を使う感覚を起点にして、視覚身体言語としての「手話」を体得していく。そうしてアートプロジェクトの現場で活用できる手話や、他者とコミュニケーションについて思考や体験を深めてきた手話講座。今回の座談会では運営チームから、講師を務める河合祐三子さんと、手話通訳の瀬戸口裕子さんに、企画づくりの工夫や実施を通じての発見、今後の展望について話を伺いました。

体制図



※2023年度の体制

事業の枠組み

- アーツカウンシル東京が実施する、アートプロジェクトの担い手を育成する事業「Tokyo Art Research Lab」の一環として実施。

役割・特徴

- アーツカウンシル東京のプログラムオフィサーが企画を立案。
- 講師、手話通訳、アートマネージャー、テクニカル、プログラムオフィサーがチームを組み、講座の内容について検討。
- 各回の講座終了後には参加者からの反応や、アンケート結果を共有する振り返りの会をひらき次回方針を確認。
- 身近にある文化の違い、意識のズレを感じた瞬間など、世間話のように語らう場も大切にした。

講座の発足当時、嘉原はアーツカウンシル東京のプログラムオフィサーとして関わっていた。初年度のオンライン講座での試行錯誤や、その後のプログラム実施を経て、それぞれの立場や専門性を活かした現在の役割分担に落ち着いた。

これまでの活動

2020年2月

アーツカウンシル東京にて「Tokyo Art Research Lab」を担当するスタッフに向けての手話講座の研修、体験会を実施。

2020年7月

Tokyo Art Research Labの一環として「アートプロジェクトの担い手のための手話講座」シリーズを開始。初回は「手話と出会う～アートプロジェクトの担い手のための手話講座　基礎編～」と題し、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けてオンライン形式での開催となった。2020年９月まで、全12回の講座を通じて簡単な自己紹介や、曜日の表現、天候の表現などを参加者とともに実践した。

2021年7月

アートプロジェクトの現場で使える手話の基礎を学ぶ動画シリーズ「手話と出会う～アートプロジェクトの担い手のための手話講座 映像プログラム～」の配信を開始し、2022年３月までに計21本の動画を公開。基礎的な手話表現のみならず、時間感覚におけるろう者と聴者の違いなど、日常のコミュニケーションにおけるズレについて寸劇で紹介。また、関連資料として指文字表「相手から見たときの指文字／自分から見たときの指文字」を制作した。

2021年8月

「手話と出会う～アートプロジェクトの担い手のための手話講座 ミートアップ 基礎編～」と題したオンライン形式の講座を2021年９月までに計４回開催。映像プログラムの内容を復習しながら、手話の実践に取り組んだ。

2021年10月

基礎編の発展として、手話での現場対応や、アートプロジェクトのアクセシビリティ環境を更新する視点を育成する「手話をつかう～アートプロジェクトの担い手のための手話講座 アドバンス編～」をオンライン形式にて開催。2021年11月までに全２回のコースを２つの日程にかけて実施し、ロールプレイングでの対話や、ろう者のゲストを迎えて、ろう者とのコミュニケーションのポイントを学ぶ場をひらいた。

2022年7月

「ワークショップ：ろう者の感覚を知る、手話を体験する」を全３回にわたって開催。アートプロジェクトの担い手のための手話講座として、はじめて対面形式での実施となった。ボールを使ったワークや、参加者どうしで目線を意識する練習など、「目で見る言語」である手話を体得するための柔軟体操のような場づくりに取り組んだ。

2022年9月

前年度と同様、映像プログラムの内容を復習しながら手話を学ぶ「プラクティス：手話と出会う」をオンライン形式にて開催。全５回にわたって、手話の基礎表現やCL表現、間違えやすいポイントについて練習する場をひらいた。

2022年10月

対面形式にて「コミュニケーション：手話を使い会話する」を2022年12月まで全６回にわたり開催。アートプロジェクトの現場を想定し、イベントの受付対応や、劇場での座席案内といったリアルなコミュニケーションをゲストとともに実践した。

2023年10月

「ろう者の感覚を知る、手話を体験する」と題し、身体でのコミュニケーションを練習する全３回の講座を２つの日程で開催。ろう者のゲストの方々とのワークショップなどを通じて、発話に頼らないコミュニケーションの姿勢を体感する場となった。

座談会

身体を動かすコミュニケーションを体感する講座づくり

河合祐三子
かわい ゆみこ

俳優／手話・身体表現ワークショップ講師。NHK Eテレ『手話ニュース』『子ども手話ウィークリー』キャスター、こども演劇WS講師、TA-net舞台手話通訳養成講座（2018年～2019年）などの指導を行う。2018年よりサインポエット（手話）と声の朗読、ダンスなどゆるやかにつながりあうユニット『でんちゅう組』のメンバーになり活動中。（写真左）

瀬戸口裕子
せとぐち ゆうこ

手話通訳士、アート・コミュニケーター。耳の聞こえない方の生活に関わる手話通訳の傍ら、耳の聞こえない方との美術館鑑賞を8年間続けた。とびらプロジェクト「とびラー」になり、ワークショップ「聞こえない方と聞こえる方のサイレントコミュニケーション」や、「アート筆談deコミュニケーション」などの“とびラボ”を実施。NPO法人TA-netの舞台手話通訳者としても活動。（写真中央）

嘉原妙
よしはら たえ
［モデレーター］

アートマネージャー、アートディレクター。国東半島アートプロジェクト（2012年・2013年）、国東半島芸術祭（2014年）、宮島達男「時の海 - 東北」プロジェクト（2022年～）など、さまざまなアートプロジェクトの企画運営に従事。2022年3月までアーツカウンシル東京 プログラムオフィサーとして、東京アートポイント計画、Tokyo Art Research Lab、Art Support Tohoku-Tokyoに携わる。（写真右）

参考 URL

これまでのプログラムや関連資料を紹介（Tokyo Art Research Lab ウェブサイト）

手話の基本やろう文化に触れる動画シリーズ：手話講座 映像プログラム（Tokyo Art Research Lab YouTube チャンネル）

教材のひとつとして活用できる指文字表：「相手から見たときの指文字／自分から見たときの指文字」（Tokyo Art Research Lab ウェブサイト）

手話講座のはじまり

嘉原　はじめに「アートプロジェクトの担い手のための手話講座」をはじめるきっかけのお話から伺いたいと思います。実はこの講座をスタートした背景には、瀬戸口さんのご経験がありますよね。

瀬戸口　そうですね。もう4、5年くらい前のことですが、アーツカウンシル東京で「東京アートポイント計画」や「TURN」のディレクターを務めている森司（もりつかさ）さんと度々お会いする機会がありました。森さんとおしゃべりするなかで、アートプロジェクトを担う方のための手話講座をつくりたいと考えているのだけど、講師としてどなたかご存知ありませんか？といった感じでお話を伺ったことがあって。

そのときに、わたしのなかにパッと浮かんだのが河合祐三子さんでした。なぜかというと、随分と前ですが、わたしが手話学習をはじめてしばらく経った頃に、どうしても乗り越えられない壁みたいなものを感じていた時期がありました。手話単語はまあまあ覚えたし、文法もいろいろ勉強したし、ろう者との交流もしていたし、自分なりに一生懸命に勉強はしていたんですね。でも、ろう者とのコミュニケーションで上手く伝わらない、通じ合わないと感じていて。ちょうどそんな時期に、河合さんのワークショップに参加して、自分自身の壁がひらいたというか、ろう者とのコミュニケーションについて気づかされた経験があったんです。

嘉原　なるほど。瀬戸口さんも河合さんのワークショップに参加された経験があったんですね。実はわたしもこの手話講座を企画する前に、河合さんのワークショップを体験しました。当時、わたしは手話が全くわからなかったのですが、例えば、吊り革を持つ仕草や乗り物に乗るときの身体の状態を思い出しながら、他の参加者と一緒にバスに乗っている風景をつくったり、自分の身体のなかに眠っていた感覚や想像力を駆使してコミュニケーションするような体験でした。瀬戸口さんが体験したワークショップもこうしたイメージや身体を使うものでしたか？

自分なりに一生懸命に勉強はしていたんですね。でも、ろう者とのコミュニケーションで上手く伝わらない、通じ合わないと感じていて。

瀬戸口　そうです。いろいろなお題が出されて、それを手話単語を使わずに伝えるというものでした。手話のレベルもさまざまな人同士と伝え合う。そうやって伝わるという感覚を体感するワークショップで、もともと自分の身体のなかにあるものに気づかされるというのかな。

例えば、「あ、これ綺麗ね」と音声や書き言葉にすると、その字面通りの「綺麗ね」なのですが、身体を使って伝えようとすると、目がパッと見開いて身体が前に出たりしますよね。逆に、汚い、臭いときは、自然と身体が後ろに仰け反って目も細くなったりする。「もともと自分が持っている身体の感覚を使えばいいんだよ」ということを河合さんに教えていただいて、「なんだ！その感覚をわたしはちゃんと持っていたのに、全然使ってなかったのか！」と気づかされたんです。

そこから、ずっとぶつかっていた壁がなくなって、自分のなかにある根源的に持っているものをどんどん使ってコミュニケーションを取ろう！これを手話にも活かそう！という気持ちになりましたね。さらに、そうしたことが手話の文法にも繋がっていることに気づかされました。

嘉原　なるほど。瀬戸口さんにとって、とても大きな体験だったのですね。では次に、そもそもどうして河合さんが、こうした感覚がひらかれていくようなワークショップを企画するに至ったのか、そのきっかけについて伺ってもいいですか？

河合　これまで幅広くさまざまな方を対象にした手話講座や講習会を実施した経験はありましたが、実は「Tokyo Art Research Lab（以下、TARL）」の手話講座までは、アートに携わる人を対象に手話を教える経験はありませんでした。どのようにアート関係の方に手話を教えるのが良いのだろうと考えていたら、身体表現をするようなワークショップのイメージで大丈夫だよ、と瀬戸口さんからお話をいただいたんですね。

ある手話通訳者からは、手全体の表現というのは、身体全体から出てくるものだと教わったんですね。

以前、アメリカにあるデフシアター「National Theatre of the Deaf（NDT）」[*1]主催のサマースクールに1か月半ほど参加したことがありました。そのときに、聴者の手話通訳者が参加されていて驚いたんです。手話通訳者も演劇表現のサマースクールに参加するのかと。その方の手話表現がすごくわかりやすくて、上手だなと思ってお話をしたところ「そう？手話通訳者も演劇表現を学ぶことは普通だよ」なんて仰ったんですね。他にも、ギャローデット大学[*2]の講座に参加したとき、教室のなかで生徒のみなさんが輪になって手話でコミュニケーションしていたのですが、実は、そこにいた生徒は全員が聴者だったんです。聴者の生徒がろう者の先生と手話で自然に会話していて、どうしてこんなにも自然に手話が表現できるのかな？と不思議でした。それから、ある手話通訳者からは、手全体の表現というのは、身体全体から出てくるものだと教わったんですね。そのときに、日本での手話指導や手話講座の在り方との違いを感じたというか。手話をはじめる前の、手話を身につける前の人にどのように教えるのが良いのか。瀬戸口さんからお声かけをいただいたときに、こうした自分自身のアメリカでの経験が活かせるんじゃないかなと思ったんです。

*1
1967年に設立されたアメリカの劇団。アメリカ手話と英語のハイブリッドの二言語演劇をコンセプトに、作品の制作と国内外のツアー活動を続けている。
https://ntd.org/

*2
アメリカ合衆国ワシントンD.C.にあるろう者のための大学。

嘉原　なるほど。河合さんのそうした渡米先での経験が、いまの手話講座にも繋がってきているんですね。

同じ感覚に気づくこと

嘉原　河合さんはよく講座のなかで、「コミュニケーションが大切」と伝えていましたね。ろう者とのコミュニケーションでは、ちゃんと目を合わせること、反応を示すことが大切といった基礎的な部分も踏まえながら、人と人として出会い、コミュニケーションするとはどういうことかを伝えていたように思います。

この３年間の手話講座に共通していたのは、異なる言語、文化を持っているわたしたちが出会ったとき、どのように「コミュニケーション」を交わすことができるのかということ。手話がわからなくても、なんとかその人と向き

合って伝え合おうとする姿勢について共有してきたのかなと。

これまでの取り組みを振り返って、河合さんや瀬戸口さんがこの講座で大事にしてきたのはどういうところだったのか、あらためて思うところはありますか？

河合　そうですね。あっという間の３年間でしたね。いま思うことは、人間の本当の底力、基礎力というのかな。例えば、こどもは聞こえる、聞こえないに関わらず、はじめて同士でも自然にコミュニケーションができることが多いと思います。でも、大人はそうじゃないですよね。大人はこうしなければならない、という思い込みで壁をつくってしまうところがある。そこで思ったんです。誰もがこどものときのようなコミュニケーションの力をもともと持っているはず。だから、それを引き出してみたらどうかなって。確かにコミュニケーションって難しいけれど、楽しいものですよね。

嘉原　2022年度の講座では、見えないボールを相手に手渡してリレーするワークショップを行いました。音声に頼らず、ボールのかたち、大きさ、重さ、質感を表情や身体の動きで表して渡していく。その次は、魚みたいなものに変化したり、全身を使って目には見えない何かを表現して、相手に伝えるコミュニケーションでした。そうすることで、だんだんと参加者の感覚や身体がほぐれていく。それもこの講座の特徴だなと感じています。

瀬戸口　いま、いろいろなところで異なる身体感覚を持っている人、異なる文化を持っている人との出会い方や接し方に関する情報を耳にするようになりました。例えば、聞こえない方と聞こえる方では、その身体感覚そのものが違うことを知ったり、異なる文化に触れて気づくことってとても楽しくて面白いですよね。

ただ、河合さんのワークショップでは、そうした違いの発見だけではなく、「あ、同じだ！一緒だ！」というところにいっぱい気づかされるんです。何かを見て一緒に楽しんだり、共感できたり、そうした同じ感覚を持っていること、もともと持っている感覚が重なる部分があることに気づくと、すごくコミュニケーションしやすくなる。お互いに違うところは違うねと言えるし、理解して尊重し合ってコミュニケーションできるということが大事なんだと思います。わたし自身もすごく大切にしているし、あらためてこの手話講座でも教わりました。

嘉原　そうですね。お互いに伝え合おうという関係性をどのようにつくっていけるのか。そのことについて、いつも運営メンバーでも話し合っていましたね。あと、河合さんと瀬戸口さんともよくお話していたのが手話の「CL表現[*3]」についてでした。例えば、ペットボトルの蓋（ふた）を外す動作の表現では、ペットボトルの形状、蓋を取り外すときの指のかたちなど、いつも暮らしのなかでやっている動作をそのまま表現すれば良いと教わったり。こうした自分の身体に馴染んでいる感覚が、ろう者とのコミュニケーションに繋がっていることに気づく。そんな気づきの入り口になるようなイメージで講座をつくってきたなと思います。

異なる言語、文化を持っているわたしたちが出会ったとき、どのように「コミュニケーション」を交わすことができるのか。

*3
もののかたちや動き、状態などを描写する手話表現の方法。CLとは、Classifireの略語で、日本語では類別詞（辞）と訳される。

それから、この手話講座をはじめた時期は、ちょうど新型コロナウイルス感染症が拡大していたので、オンライン形式でスタートしましたね。

瀬戸口　そうでしたね。

河合　大変でしたね。

嘉原　オンライン講座という方法も、手話講座の企画運営も、手話学習もはじめてという、はじめてづくしのなかでのスタートでした。わたしも参加者と一緒に手話を学んでいて、河合さんが「間違えても大丈夫！繰り返し練習して身体で覚えていけばいいんだよ」と言ってくださったのがすごく励みになりました。それはきっと参加者も同じだったんじゃないかなと思います。

オンラインの画面上に参加者のみなさんが映り、河合さんと一人の参加者が対話の練習をするときには、他の参加者もそれぞれ身体を動かしながら練習している姿がだんだんと増えていきましたよね。それは、この手話講座で大切にしている身体や感覚からの気づきが、参加者のなかにも生まれていると実感する風景でした。河合さんや瀬戸口さんは、講座のなかで思い出深い風景などはありますか？

オンラインで開催した講座の様子。（撮影：齋藤彰英）

河合　たくさんあります！　オンラインと対面の違いもあらためて感じました。オンラインの場合は、それぞれの場所から接続して、画面上で一人ひとりとコミュニケーションします。自分がわからないときに、助けてくれる人が周囲には誰もいないので、とにかく一人で頑張らなきゃいけないという気持ちだったんじゃないかな。対面の場合は、周囲に参加者がいるので、他の方の手話表現を参考にしたりもできますよね。それから、もしかしたらこれは聴者の文化なのかもしれませんが、対面のときは手話がわかる人とまだあまりわからない人の差が目立ち、手話がわからない人が遠慮がちになることもあると感じました。

　わたしは、対面講座の方がより良いなと思っています。いろいろな聴者の感覚や文化にも気づくことができるし、反対に参加者には、ろう者の感覚やろう文化を発見してほしい、どうしたらそれに気づいてもらえるだろうかと常に考えていましたね。

瀬戸口　まさかの、いきなりオンライン講座になってしまって。戸惑いながらも企画運営チームのみなさんと、講座を絶対開催しよう！より良い講座にしていこう！という、その熱量にわたしも励まされながらつくってきたなという思い出があります。

　間違えたり、わからないのが当たり前なのだから、わからないときは、まずはちゃんとわからないと言ってください、と河合さんが何度も講座のなかで話していて。それはすごく参加者にとって「ほっとする」メッセージだったと思いますし、安心できる講座になっていたんじゃないかなと思います。あと、オンラインの場合は画面に一人ひとりの参加者が綺麗にはっきりと見えますよね。それまでの時代にはなかった新しいコミュニケーションのかたちで、新たな気づきもたくさんありました。

嘉原　2020年、2021年とオンライン講座が続いて、2022年になってはじめて対面講座を実施することができました。「アートプロジェクトの担い手のための手話講座」というタイトルにもあるように、わたしたちとしては芸術文化の現場に携わっている方々に、この手話講座を通して、手話やろう文化に出会ってほしかった。そして、それぞれの現場でろう者とのコミュニケーションに繋がる新たな仕組みが生まれることを願って取り組んできましたね。

　それから、気をつけたいと意識していたのが、ケアやサポートといった視点についてです。聴者がろう者とコミュニケーションするとき、どこかケアしよう、サポートしようという振る舞いが生まれてしまうことがあるように思います。もちろん、ケアやサポートも大切です。でも、お互いの異なりを知り、わからないと正直に伝え合って、じゃあ、どうすればわかり合っていけるのだろうか、という問いを隣に並んで一緒に考えていく体感というのかな。この手話講座では、障害の有無に関わらず、人と人として出会い、どのようにコミュニケーションできるのかを考えたり、その問いを自分のなかに持ち帰って、考え続けてもらいたいという目標もありましたよね。

瀬戸口　参加者のなかには、アートプロジェクトに関わっている方、美術館や劇場などの企画運営に携わられている方も多かったですね。講座でも、イベントにろう者が来場されたときを想定して、受付対応の練習も取り入れました。実際の現場でも、筆談ボードはここに置きましょうとか、目が見えない方が来場されたらこうしましょう、というように、対応マニュアルは整理されてきているように感じます。

　でも、人間ってみんな習性的に「型」にはまりやすいところがありますよね。河合さんの講座は、そうした対応方法の型はおさえつつも、さらにその先を視野に入れた内容だったと思います。現場では思いがけないハプニングが起きるもの。型にはまり、凝り固まりすぎていると、大事なコミュニケーションが省かれてしまう面もあると思うんです。整理した対応マニュアルも大切だけど、そこを越えて出会った瞬間のコミュニケーションの仕方を日頃から意識づけていたら、もっと創造的に新しい方法をつくれるんじゃないかなと。そして、なによりろう者とのコミュニケーションの楽しさにも繋がると思いますね。

嘉原　そうですね。この講座では企画運営においても、コミュニケーションの創意工夫を重ねてきました。例えば、打ち合わせの席を一つとっても、どこに誰が座るか、手話通訳はどの向きが良いかなど、ささやかなことかもしれませんが、お互いに確認し合って進めてきましたね。わからないことがあったら尋ねて、教わって、一緒に考えて、こうした場や環境をつくっていくのが大事なのだと、わたし自身も実感しています。

河合　本当にそうですね。あと、わたしが、「獅子の子落とし」みたいに参加者を谷に落とすような企画も提案しましたよね。各地に住むわたしの友人たちとオンラインでつないで、いきなりろう者のリアルな声を聞いてみよう、話してみよう、みたいな企画をつくったり。突然のことで参加者のみなさんがびっくりして固まってしまうこともありましたね。

対面形式の講座では、筆談ボードなどを使って発話に頼らない受付対応などにもチャレンジした。
（撮影：齋藤彰英）

　オンライン講座では、Zoomの画面表示の方法なども運営チームから提案してもらって、いろいろと教えていただきながら進んできました。獅子の子落とし的な時間は、ちょっとやりすぎたかなと思ったりもします。でもね、それでいいんです。やはり、マニュアル通りにいかないときだってあるはずだから。コミュニケーションはズレて当たり前、ズレることは怖くないんだということを体感してほしかったんです。わたしたちろう者は、社会のなかで「ズレ」の経験をたくさんしていますから。一方的に教えるという関係ではなくて、一緒にどうしたら良いかを考えながら進めようってことですよね。

運営チームのコミュニケーション

嘉原　では続いて、手話講座の運営体制についても振り返りたいと思います。河合さん、瀬戸口さんに加えて、オンライン配信や映像収録などの環境を整えてくださったのが齋藤彰英（さいとう あきひで）さん。主催であるアーツカウンシル東京のプログラムオフィサーにも伴走していただきながら、この手話講座をつくってきました。あらためて思うのは、毎回、講座の実施後に振り返りを行い、良い点や課題点を共有して、より良いかたちを模索し続けてきたことが特徴的だったなと。例えば、オンライン講座では、毎回参加者のみなさんに一言、二言でも良いので気づきや感想をアンケートでお尋ねし、書き終えた方から退出する方式を取りました。そして、その回答をすぐに運営チームで確認しながら、次回はどうやってより良くしていけるだろうと話し合う、そうした時間を丁寧に重ねたように思います。それから、講座の前後の時間には、本当にいろいろとおしゃべりをしましたよね。それがとっても楽しくて。アットホームな雰囲気が講座全体にも通じていたように感じています。お二人は

オンライン配信中のスタジオの様子。
（撮影：齋藤彰英）

運営まわりのことで思い出すことはありますか？

瀬戸口　オンライン講座としてスタートして、齋藤さんやみなさんが配信の仕組みを整えてくれて、とてもやりやすい環境をつくってくださいました。参加者が画面にどう映るとコミュニケーションしやすいかなど、細やかなところも工夫してくださり本当に画期的な講座になったなと思います。

それから、嘉原さんが仰っていたように振り返りの時間ってすごく大事だなと思って。だいたい講座って、やったら終わりということが多いと思います。でも、参加者一人ひとりからフィードバックをいただいて、わたしたちも気づかされることがありました。そうした経験はとても大きかったです。さらに、各回講座の様子を録画して、それを復習用動画として参加者に共有していましたよね。河合さんの手話を繰り返し何度でも見返して学べるわけですから、非常に贅沢（ぜいたく）だなと。こういう授業をわたしももう一度受けたいと思いましたね。対面講座ができるようになったときには、オンラインの良さも使って全国のろうのゲストの方々とお話ししたりと、ハイブリッドな方法も試しました。

嘉原　対面講座では、オンラインで全国各地の河合さんのご友人と会場とを繋いでお話を伺いました。無礼講（ぶれいこう）ということで、いつもはちょっと遠慮してろう者に聞けないようなことでも、今日はなんでも聞いていいよと話し合う時間をつくりましたね。

河合　あらためて、みなさんにはわたしのわがままを聞き入れてくださって本当に感謝しています。それぞれの役割や立場も理解できていたので、いろいろな相談ができました。個人的には、講座のなかで「ろう文化」を押しつけないようにと注意していたのですが、運営チームのみなさんが「大丈夫ですよ」と仰ってくださったので、聞こえる人はどう思うの？とか、お互いの感覚でわからないことを尋ね合ったり、いろいろな話し合いができたように思います。

全国の友人たちとオンラインで話せたことは、とても面白かったですね。いい時間でした。言語も感覚も異なるわけですから、コミュニケーションはズレることがある。でも、それをズレたままで終わらせないように心がけていました。スタッフ同士の仲の良さも講座に良い影響を与えていたと思いますね。ろう者だけじゃなく、聴者と一緒に進めるというのが、わたしの考え方の基本にはあるので、とても良い運営体制で進められました。

嘉原　河合さんのなかで、この講座で注意していたことや、ここはぶれないようにしようと決めていたことはありましたか？

河合　手話は見る言語で、身体全体を使って表現するものだということを伝えたいと強く思っていました。この講座を通して、参加者のみなさんが職場やいろいろなところで少しでも役立つものがあったらいいなと取り組んでいましたね。

手話は見る言語で、身体全体を使って表現するものだと伝えたいという思いが強くありました。

聞こえない方と出会っても、目の見えない方と出会っても、もっと自然にコミュニケーションができる世の中になってほしいです。学んだことをマニュアル通りにやって終わりではなくて。人と人とのコミュニケーションを当たり前のこととして、普通に考えられる人が増えていってほしいと願っています。でも、それはわたしたち、ろう者だけではできないですよね。聴者も一緒に取り組めたらいいなと思います。この講座をきっかけに、参加者一人ひとりのなかに、コミュニケーションに対する意識の変化が少しでも起こっていたなら嬉しいなと思います。

嘉原　その話を聞いて、もう一つ河合さんにお尋ねしたいことがあります。この講座を通して、河合さん自身が新たに掴んだことや気づきなどがあれば聞かせていただけますか？

河合　参加者の多くがアート関係者ということもあるからか、感受性の高い人が多いなと感じていました。美術は目で見るものですよね。そうした見る力に長けている人が多いなと思いました。見る力があるというのは、とても大きいことです。この手話講座でも短い時間でしたが、教えたことをすぐに表現することができていたのでびっくりしました。これまでゲストとして参加してくれた人たちも同じような感想を言ってましたよ。だから、アート関係者が手話を学び対応する機会が増えていくことで、ろう者とのコミュニケーションがひらけていくんじゃないかなと期待しています。

嘉原　なるほど。対面講座の際には、ゲストに現地にお越しいただくこともありましたね。河合さんの手話とはまた異なるろう者の手話に直接触れることができたのも、良かったなと感じています。

瀬戸口　ものすごく貴重な体験ですよね。きっと参加者のなかには、ろう者との出会いは河合さんがはじめてという方も多かったように思います。社会のなかで、この人がろう者だと見た目では気づきにくいこともありますよね。出会いたくても出会えないという状況だと思います。この講座では、素敵なゲストの方々がたくさん来てくださって、一人ひとりの生い立ちや日常生活のなかで感じていることなどをたっぷりお話しいただきました。

嘉原　そうしたゲストそれぞれが、実際に体験したことをシミュレーションし、参加者が体感してみるということもやりましたね。劇場の受付にろう者がやって来てチケットの購入から座席への誘導をしてみたり、本屋で一緒に欲しい本を探す練習をしたり。そこで大事にしていたのは、自然なコミュニケーションでした。だからこそ、なかなか伝わらないこともあって。

この伝わらない経験も大事だと意識して、講座の企画運営をしてきましたよね。伝え合う、通じるということは大切ですが、伝わらなさを実感し、どうすれば意思疎通ができるかを考え工夫することが、本当の意味でのコミュニケーションなのではないかって。

河合　そうですね。例えば、接遇の場面ではいろいろな方がお越しになりますよね。伝わる人がいれば、伝わらない人もいる。伝わらないと、どうしよう…と不安になり緊張してしまう。でも、そこで終わらずに、どうすれば伝わるのかを考える機会をみなさんに提供したいと思っていました。だから、ゲストのみなさんには、普段通りのコミュニケーションをしてくださいとお願いしていたんです。

嘉原　この手話講座で体感したことを通して、参加者のみなさんが、それぞれの現場で、またご自身のなかで、ろう者とのコミュニケーションについて考えたり、工夫したりするスタートラインに立っていただけていたらすごく嬉しいですね。

今後の取り組み、新たなチャレンジの種

嘉原　最後に、今後の手話講座の展望についてお話を伺います。これからチャレンジしたいと思っていることや、今後やってみたいアイデアなどあればお聞かせいただけますか？

河合　聴者側の立場からろう者に何かを伝える新しい方法をやってみたいです。これまでは、ろう者がお客さんという立場のシチュエーションが多かったですよね。今度は、ろう者が受付スタッフ、聴者がお客さんという、立場を逆転したコミュニケーションも試してみたいです。とにかく、わかる、わからないとかそういうことは抜きにしてやってみてほしい。立場を逆転すると、また何か新しい発見に繋がるんじゃないかなと思っています。

嘉原　それは面白そうですね。逆の立場でのコミュニケーションはこれまでやってきていないので、新たなチャレンジになりそうです。瀬戸口さんはいかがでしょうか？

瀬戸口　チャレンジしてみたいことは、手話での作品鑑賞ですね。例えば、作品には日本語では説明できないかたちがあったりしますが、手話やCL表現では細かく伝えることができます。イメージを伝える、表現する、というところから手話でのコミュニケーションに繋がると面白そうだなって。

　立場を逆転してコミュニケーションするという河合さんのアイデアも、すごく興味があります。どうなるんだろう、楽しみですね！

河合　少し不安に感じることもあるかもしれませんね。ドキドキするけど、ワクワクもありますよ。

嘉原　瀬戸口さんのアイデアもすごくいいですね。実際に作品がある場所に行ってできると良いのですが、これまではコロナ禍ということもあってなかなか難しいところがありました。これまでも話し合うなかで、アイデアの種はたくさん出てきていますが、実際にこういう場所でやってみたいというイメージはありますか？

河合　いっぱいあります！　美術館や博物館でもやってみたいですね。あと、ろう者のお客様が突然来てほしいんですよね。もともと来ることが前提ではなくて、誰が来るかは参加者には伝えずに突然やって来たら、というシチュエーションもいいなと思っています。もう、やりたいことがいっぱいありすぎます。

嘉原　それも面白そうですね！　他には今後、工夫したいと考えていることはありますか？

河合　何気なく「見ている」のではなくて、集中して「見る」。「見る」ことに慣れてほしいなと思っています。

嘉原　つまりそれは、「見る」という感覚を参加者自身がぐっと掴まえる、実感できるような講座にしていきたいということですか？

河合　そうです。

嘉原　「見る」と「見ている」の違いは、大きいですよね。ろう者と手話で会話するときは、集中して「見る」という感覚が強くなるなと感じます。ろう者の視野の広さや見るとはどういうことなのかを、わたしもこの３年間ですごく実感しています。今年度の講座も限られた時間ではありますが、その「見る」ことのエッセンスに触れてもらえるような内容にしていきたいですね。

　それでは、最後にお二人から一言ずつコメントをいただけると嬉しいです。座談会を振り返っての感想でも良いですし、今後の意気込みなど伺えますか。

瀬戸口　いま話されていた「見る」、「見ている」っていうこともなるほどなと思って。やはり聴者は、ただ「見ている」ということがもしかしたら多いのかもしれないですね。ろう者は、視覚的な情報をいろいろ集めている、その情報量の多さや広さ、深さというのはものすごいなといつも感動しています。だから、参加者のみなさんにも「見る」ことのすごさを感じてほしいなと思いますね。

　そして、今日も何度も話してきましたが、自然に接するということ。マニュアル通りではなくて、自然なコミュニケーションができる社会になってほしいですね。逆に、なぜそれができないのだろうかと考えると、そこに何か自分でも気づけていないバイアスがたくさんあるんじゃないかなって。そのバイアスはどこから来るのか、どうしてつくられてしまったのか、そうしたところも深掘りして、考えて、付き合っていけるような講座になるといいなと思います。

河合　楽しく進めたいですね！　ろう者も聴者もお互いにコミュニケーションを模索しながら、理解し合っていければいいと思っています。

　これは良い、これはダメということではなくて、この方法もあるし、こんな別の方法もあるよ、というようにお互いに探求し合うというのかな。何かを批判し合うのではなくて、お互いに歩み寄った先で、パッと同じように合った点を大事にするように、楽しみながら進めていきたいですね。

嘉原　わたしは、河合さんをはじめろう者の方々にはじめて出会ったとき、手話という世界や手話で紡がれていく物語に触れて、自分の世界や視野がブワーッと広がった感覚がありました。世界はこんなにも奥行きがあるのかと実感して、すごく嬉しかったのを覚えています。知らない、わからないことを恐れずに、もっと知りたい、学びたいという気持ちで、みなさんと一緒に学び合いながらこの手話講座をつくっていきたいと思っています。今日は本当にありがとうございました。

収録日：2023年8月25日
手話通訳：伊藤妙子、山崎薫、新田彩子

PROJECT 02

TURN /
Creative Well-being Tokyo

文化事業の担い手がアクセシビリティを
考えるための映像制作に向けて

ABOUT

他者との感覚の異なりに気づき
ともにつくるための術を探求し続ける

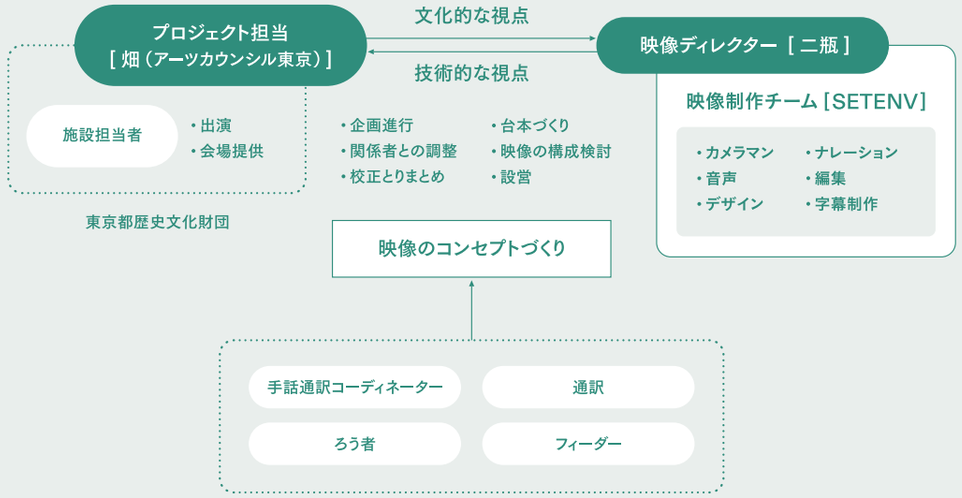
「TURN（ターン）」は、障害の有無、世代、性、国籍、住環境などの背景や習慣の違いを超えた多様な人々の出会いによる相互作用を、表現として生み出すアートプロジェクトの総称です。東京都による「東京2020 オリンピック・パラリンピック」の文化プログラムを先導するリーディングプロジェクトのひとつとして2015年度にスタートし、その後、2017年度からは東京2020 公認文化オリンピアードとして展開。2021年度は、東京2020 NIPPONフェスティバル共催プログラムとして実施しました。

主催には東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、特定非営利活動法人 Art's Embrace、東京藝術大学（2018年度～）が並び、7年にわたる実施期間で約80名のアーティスト、約60の施設や団体が参加しています。アーティストと福祉施設や社会的支援を必要とする人々が共働活動を重ねる「TURN交流プログラム」や、福祉施設や団体がアーティストとともに日常的に参加型プログラムを企画・実践する場を地域につくる「TURN LAND（ターンランド）」、事業の担い手が集い作品展示やワークショップなどを開催する「TURNフェス」など、さまざまなプログラムを展開。そのひとつ「TURNミーティング」では、参加アーティストや交流先の関係者とともにTURNの可能性を共有し、語り、考え合う場をひらいてきましたが、コロナ禍において対面開催が難しくなり、2020年に初のオンライン配信に挑戦しました。

その後、都立文化施設や文化事業を通して、誰もが芸術文化にアクセスし楽しめる環境の構築を目指す事業「Creative Well-being Tokyo（クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー）」がTURNの知見を引き継ぐかたちでスタート。高齢者、障害者、乳幼児、海外にルーツをもつ人など、さまざまな人たちが文化事業に参加し、ともに創造していくための環境整備の拡充や、プログラムの検証、モデル開発、現場での実践や調査に取り組んでいきます。その一環として、2022年度には東京都歴史文化財団の職員が情報保障のあり方やアクセシビリティの考え方を学ぶための研修映像を制作。TURN ミーティングのオンライン配信を担当したチームが再結集し、それまでの気づきや発見を活かしながら進行しました。

さまざまな専門性をもつ人々が集い、それぞれの文化について考えながら企画をつくる。他者との感覚の異なりに気づき、ときにはそれまでの経験を疑いながら、ともにつくるための術を探求し続けてきました。今回の座談会では、TURN ミーティングや研修映像制作の進行役を担った畑まりあさんと、それぞれの配信・映像制作のディレクターを務めた二瓶剛さんに、企画づくりの際の課題、自身の変化、今後の展望について話を伺いました。

体制図



※研修映像収録（2022年度）の体制

事業の枠組み

- アーツカウンシル東京が主催となり、「TURN」「Creative Well-being Tokyo」（CWT）を実施。「TURNミーティング」は「TURN」事業の一環として実施。

役割・特徴

- オンライン版「TURNミーティング」では、アーツカウンシル東京が企画進行を担い、配信チーム、通訳チームらと会場の設えを検討。
- 続く「Creative Well-being Tokyo」における研修映像の収録も、これまでの経験を踏まえて制作チームのコアメンバーが再集結。
- 撮影場所となる文化施設の特性や、そこで日常的に必要となる応対を踏まえて企画を検討。
- 実際にその施設で働くスタッフも出演者となるなど、一人ひとりから意見を集めながら制作、編集を行う。

オンラインで実施することになった「TURNミーティング」でのコミュニケーションを活かし、CWTにおける研修映像の収録に取り組んだ。さまざまな人々とともにつくる姿勢を大切にし、畑や二瓶のほか、手話通訳コーディネーターがコアメンバーとなり奔走した。

これまでの活動

2015年4月

「TURN（ターン）」事業が始動。構想時から一過性のイベントに留まらない展開を視野に始動した。監修に日比野克彦（アーティスト）を迎え、事業の体制づくり、プログラムの設計を起点にさまざまなプログラムが動き出す。

2017年6月

第1回 TURNミーティングを開催。初回は東京藝術大学に事業に関連するアーティストや施設担当者らが集い、展望を語り合った。2017年度は第4回 TURNミーティングまでを開催。TURNの取り組みや特性、社会包摂、地域への広がりなどさまざまな社会へのアプローチについて語り合った。

2020年9月

第11回 TURNミーティング「出会い方とコミュニケーションのいろいろ ―様々な手法やツールを通じて考える―」を開催。TURNミーティングとしては初のオンライン配信での実施となった。「TURN」の監修者である日比野克彦とゲストによる対談や、パフォーマンスの実演などに取り組んだ。

2020年11月

第12回 TURNミーティング「『ろう文化』ってなんだろう ―『手』で会話する?―」をオンライン配信にて開催。ラップパフォーマンスを披露したほか、ろう者と聴者のコミュニケーションの違いなどをテーマにゲストとトークを実施した。

2021年3月

第13回 TURNミーティング「きく・ふれる・そうぞうする ―身体感覚を通してとらえる世界―」をオンライン配信にて開催。スポーツとアートを切り口に、想像する力についてゲストと言葉を交わした。

2021年8月

第14回 TURNミーティング「コミュニケーションの難しさ」をオンライン配信にて開催。2020年度にオンラインで実施した「TURNミーティング」の取り組みを手話通訳などの関係者と振り返りながら、ゲストとともにコミュニケーションの多様さや難しさについて考えた。その後、12月には第15回 TURNミーティング「TURNの今とこれから」を東京都美術館にて対面形式で開催した。

2022年10月

「Creative Well-being Tokyo（CWT、クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー）」の一環として、東京都歴史文化財団が運営する美術館、博物館、ホール、文化事業などの担当職員に向けた研修映像の制作がはじまる。特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワークが編集した冊子『観劇サポートガイドブック』を参考に、アクセシビリティについて財団職員が考えるための企画を検討した。

2023年1月

文化施設や文化事業を取り巻く近年の社会状況と法制度、アクセシビリティにおける基本的な考え方や接遇の仕方を学び、文化施設などの現場で実践的に活用できる知見を深めることを目的とした映像「クリエイティブ・ウェルビーイング研修」を財団職員に向けて配信。
その後、「クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー 映像で知る文化施設のアクセシビリティ」として映像を公開。

座談会

「映像制作」を通じた、感覚の異なる他者との出会い

畑まりあ
はた まりあ

アートマネージャー、東京藝術大学特任助教。東京藝術大学大学院修了、パリ第一大学パンテオンソルボンヌ修士課程修了。アートプロジェクトや文化政策を研究し、2016年度から「TURN」、2023年度に「TURN LANDプログラム」「Creative Well-being Tokyo」事業に従事。他分野の人たちと協働した情報保障やアクセシビリティの推進を目指す。（写真左）

二瓶剛
にへい ごう

映像ディレクター。北海道札幌市に生まれ、アラスカ、千葉で過ごし、現在は横浜に在住。 東京造形大学研究課程修了。作家、演出家、カメラマン、編集者として、文化芸術に関わる映画、PV、配信などのさまざまな映像制作に従事。近年ではNHKや民放の報道、ドキュメンタリー、美術番組などの数々を担当。（写真中央）

櫻井駿介
さくらい しゅんすけ
［モデレーター］

アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー。これまで、インストーラーとして各地の芸術祭や展覧会の展示施工・現場設計を担うほか、アートプロジェクトのマネージャーとしても活動。2021年4月より現職。東京アートポイント計画及びTokyo Art Research Labに携わり、NPOの中間支援、映像制作や冊子づくりなどの企画を担当。（写真右）

参考 URL

TURNの活動を振り返るドキュメント：TURNジャーナル　SPRING 2022 – ISSUE 08（TURNウェブサイト）

2020年度に挑戦したオンライン配信の取り組みを紹介：オンライン配信版「TURNミーティング」紹介映像（アーツカウンシル東京 YouTube チャンネル）

クリエイティブ・ウェルビーイング・トーキョー 映像で知る文化施設のアクセシビリティ（CWTウェブサイト）

「TURN」からのはじまり

櫻井　畑さんと二瓶さんが制作チームとしてはじめて関わったのは、アーツカウンシル東京の「TURN」というプログラムですね。まずはお二人の出会いや企画について、その背景や当時の状況をお聞かせいただけますか？

畑　出会いは、「TURN」の一環として実施していた「TURNミーティング」というトークイベントでした。当時、コロナ禍ということもあり観客を集めての開催が難しくなったとき、このイベントをオンラインで実践できないだろうかと話し合いがあったんです。これまで「TURN」で取り組んできた情報保障も活かして、オンラインイベントにおける情報保障を考える機会にしようと。そのときに、映像配信のテクニカルチームとして株式会社SETENV（セットエンヴ）に入っていただき、そこから、二瓶さんとは配信方法やオンラインの情報保障について一緒に考えていくことになりました。

2020年度は、オンラインでの「TURNミーティング」を3回ほど開催したのですが、毎回、企画をブラッシュアップしながらつくっていきましたね。やはり、それぞれ専門領域が違いますから、お互いのやり方やつくり方を学び合い、意見もぶつけ合って議論していたと思います。

櫻井　まさにトライアルですよね。それまで対面形式で行っていた企画をオンラインで取り組もうとするとき、チーム体制や進め方などさまざまな試行錯誤があったと思います。

二瓶さんは、もともと映像制作の分野において情報保障やアクセシビリティに関する取り組みには携わっていたのですか？

二瓶　いや、情報保障とはなんぞや、という感じでしたね。だから、情報保障を必要とする方のためにという思いも希薄でしたし、当初は、あくまでも自分が培ってきた映像制作の経験の延長線上にある一つの案件としてお引き受けした、というのが正直なところです。

櫻井　なるほど。では、このオンライン企画に取り組むなかで、お互いの役割分担やそれぞれの専門領域がどのように交わりながら企画を実現したのか、具体的に伺いたいと思います。畑さんは、当時はどのような体制で進めていったのでしょうか？

畑　対面形式のときから、情報保障については手話通訳や文字支援の方と話し合いながら進めていました。それが、オンライン配信になったときには、「TURN」の企画者、情報保障チーム、映像配信チームと、大きく3つの異なる専門領域の方々と協働して取り組むという状況になりました。

この三者でコミュニケーションを取っていくと、やはりそれぞれの視点や慣習が違うことに気づくんです。一緒に取り組むためには、そうした視点のすり合わせやイメージの共有が必要だと思いました。だから、企画内容や情報保障について、それぞれのチームと個別に会議をしたり、あるいは引き合わせる、出会ってもらう、という状況のセッティングを行いました。それをどのタイミングで、どうやって行うか、今日はどこまで話そうかなど、打ち合わせ一つ取ってもいろいろと工夫がありました。毎回、もっとこうすれば良かったと思うことが出てくるので、そうした工夫を積み重ねながら関係性を繋いでいく。この企画を通して、そうした繋ぎ役のような立場の人が必要だということを、わたし自身がやりな

がら実感することになりましたね。

櫻井　これまでに取り組んできた仕事のやり方やルールみたいなものを、コロナ禍やオンライン化を経て、あらためて考え直していく状況にあったのですね。

畑　やり方もそうですし、あとは各自にとっての当たり前の視点が違うんですよね。だから、それぞれの視点のままだとスムーズにはいかない。そもそもの前提が違うから「なんで?」ということが起こってくる。そういうときに、この取り組みにはこういう背景があるんだ、この人はこういうところを気にしているんだ、といった話をして。だから、三者それぞれにとっての当たり前の認識が揺れるような取り組みだったのかなと思います。

櫻井　二瓶さんは、映像制作の立場から企画内容やチーム編成についてどのような感想をお持ちでしたか?　また、二瓶さん自身はどのような関わり方をされていたのでしょうか?

二瓶　最初は、映像ディレクターとして参加することになったので、ある一定の方向性を指し示す役割だと思っていました。ですが、そもそも我々が参加した段階で、畑さんたち、アーツカウンシル東京のみなさんは、何年もこうした情報保障やアクセシビリティに関わり、さまざまな知見をお持ちだったんですよね。だからそのぶん、情報保障に対する「こうしたい」という思いも強くて。

例えば、最初は、企画構成や台本をつくるときに、非常に情報過多だなと思っていました。TURNミーティングは、テレビ的なフォーマット、要は簡略して、わかりやすく伝えることに長けたフォーマットなんですよね。でも、台本づくりのやりとりをしているときも、畑さんがバーッて書き詰めてきたものを僕が削って返す、するとまたガーッと書かれたものが戻ってくるみたいな。別に対立していたわけじゃないんですよ。でも、そうした視点や意見のすり合わせが長く続いて。でも、畑さんたちからお話を聞くと、こうして情報が多くなる必然性がわかってくるんです。では、それをどうやって映像に落とし込むかというのを考えていきました。

当初は自分はディレクター・演出家という役割で入っていましたが、だんだんと編集者のような役割に変わっていった気がします。ディレクターは、いろいろな要素を削ぎ落としてタイトにシャープにしていくのが重要な能力だと言われていますが、ありとあらゆる要素を活かす、何らかのかたちで反映するというふうに、自分のマインドも変わっていきましたね。

櫻井　それは興味深い変化ですね。当時のやりとりのことを畑さんも覚えていますか?

畑　はい、覚えています。情報保障チームと映像配信チームそれぞれに、こういうことをやりたい、なぜならこういう理由で、こういう視点や世界観があって、といった説明をする時間がいつも以上に必要だったなと思います。でも、そうやって丁寧にお互いの考えていることを聞いていくと「映像制作の視点からすると、情報保障や当事者の方の意見をすべて反映するのは難しいけれど、どうしましょうか」と話し合えるようになっていくんですね。本当にはじめての取り組みだったので、説明を重ねるというプロセスの連続でした。

櫻井　情報保障に関して、畑さんとしても譲れない部分というか、このラインはちゃんと伝えていこうと意識されていたことはありますか?

畑　わたしは情報保障チームと映像配信チーム双方の話を聞くことができるので、情報を伝えるにあたって最低限必要なことは何か、ということをイメージしたり理解したりできるんですが、双方間ではなかなか伝わらないという状況もありました。そのすり合わせには時間がかかることはわかりつつも、全体のスケジュールも意識して動かなければならないので、どういうふうに伝えたらいいかなと葛藤しながら進めていましたね。

ありとあらゆる要素を活かす、何らかのかたちで反映するというふうに、自分のマインドも変わっていきましたね。

櫻井　なるほど。当時、わたしも別の事業で映像制作やオンライン企画に携わっていたので、情報保障やコミュニケーションについて事前に考えておかなければならないことや、オンラインと対面での「伝わり方」の違いや危うさなど、いろいろと悩んでいたことを思い出しました。

異なる視点をすり合わせて進む

櫻井　専門領域が異なるチームで企画を進めるとき、お互いの領域に踏み込んでいかなければならないこともありますよね。台本づくりをはじめ、意見もぶつけ合って試行錯誤しながら進めたなかで、実際の本番の様子はいかがでしたか？

二瓶　トラブルが次々と起こる現場で、問題は常にありました。オンラインでの「TURNミーティング」は、リアルタイム配信という形式をとり、そこにどれだけ正確な情報保障やアクセシビリティを反映していくかというトライでもありました。手話通訳のみなさんもライブの進行に合わせるための苦労もあったし、音声字幕も誤字があったり、表示がどんどん遅れてしまったりと、情報の精度の問題も出てきました。とはいえ、「トライなんだから、そういう問題が出るのは当然だし、しょうがない」という気持ちが僕にはあったんですよ。

　でも、手話通訳チームや当事者のみなさんから、「そもそもなぜリアルタイム配信にする必要があるの？」「落ち着いて収録を見て内容がわかることが重要なのに、どうして受け取り手である当事者の方を向いて企画を進められないのだろう？」という意見をいただいて。そう言われると、その通りだなと思って。僕たちはリアルタイムで、みんなで何か一つのことを共有することが素晴らしいとどこかで思っていたけれど、情報保障という観点では、その優先順位が高いわけではない人もいる。時間に関わる感覚や価値も異なってくる。そういうことに対する目配りがなかったなと、いろいろ気づかされましたよね。マインドを変えてやらないとって。だから、最終的には、リアルタイム配信ではなく、収録して情報保障を反映したものを配信する方法でやろうと変化していきました。

櫻井　なるほど。企画を届けたい人の立場に寄り添って、もう一度企画を練り直すことになったのですね。企画づくりを通じて、価値観や文化の異なりみたいなものを制作チームが感じるきっかけにもなっていたのかなと思いました。

　畑さんから見て、本番の様子のことなどを振り返ってみていかがですか？

畑　なるべくいろいろなことを想定して本番に臨むのですが、思った以上に準備できていなかったなと、愕然（がくぜん）とすることが多かったですね。現場では、そこで話されたことをまず聴者の手話通訳が通訳し、それをろう者の手話通訳が再度通訳するという「ろう通訳」の方法を取っていたり、カメラマンも数名いたりと関わっている人が多いこともあって、当日は、みなさんとコミュニケーション・リレーのようなことをして、必要なところを補完して進めていく状況でした。例えば、トークのための“キュー出し”を取っても、この人には誰かから伝えないと気づかないよね、みたいなことが現場でいろいろ出てくるわけです。

　また、情報保障に関して、通訳者のみなさんがどのようなことに不安を感じ、懸念（けねん）があるのか、その背景を知ることができたことも大きな気づきでした。例えば、手話通訳者が通訳を迷ってしまったり、うまく通訳できないことが起こったとします。すると、その通訳者にクレームや指摘が入るということがあるそうです。でも実際は、通訳技術の問題というよりは、話されているテーマ自体の複雑さや抽象度など、通訳が困難な内容や状況の問題だったりするわけです。そういった不安や懸念があるから、ライブではなく収録にしてほしいという通訳者からの意向もありました。こうした日常にある困難さみたいなところに、不安や懸念が紐づいていることを、企画に携わる制作者たちが知る機会にもなったことは良かったと思うし、多様性の視野がものすごく広がった経験でした。

通訳者のみなさんがどのようなことに不安を感じ、懸念があるのか、その背景を知ることができたことも大きな気づきでした。

第８回 TURNミーティングの様子。（撮影：鈴木竜一朗）

櫻井　さまざまな立場の人が関わる企画は、みんなが伝えたいことを言えているかどうかなど、一人ひとりに注意を向ける必要がありますよね。このオンラインプログラムにおいても、さまざまなことに共感し目配りする視点を持つ畑さんの存在は大きかっただろうと想像します。二瓶さんから見て、畑さんの役割はどのように感じられていましたか？

二瓶　ありとあらゆる対象、人に対して公正であろうとしていましたね。何者もこぼれ落ちないようにしようという思いがすごく強いぶん、我々がつくるコンテンツに落とし込む際にはやっぱり無理があったり、軋轢（あつれき）みたいなものが生まれたりするんですよね。何かに優劣をつけておいた方がよっぽど楽だろうと思うんですが、畑さんは、やっぱりそれをしないんですよ。ちゃんと矢面に立って、僕らに対してもちゃんと要求するし、人の意見も聞いて、厳しい言葉を受けたりもしていたのを見ていて、深く尊敬していました。いろいろバチバチと衝突もあったかもしれないけれど、それはとても良い、前向きなやりとりだったと思います。お互いに、敬意もどんどん芽生えていくようなときでしたね。

櫻井　二瓶さんは、こうした現場のなかで、映像ディレクターとしてのバランス感覚が揺らいでいったのかと思います。あの人の声もあるし、この人の声もあるし、こんな意見もあって、とか。そうしたなかで、二瓶さんとしての現場への向き合い方みたいなものには変化がありましたか？

二瓶　先ほども話したように、僕がこれまでやってきた仕事は、テーマに沿って伝わりやすいように情報を落として内容をぎゅっとタイトに詰めるというもので、そこが僕の能力の発揮のしどころでした。でもこの企画の場合は、「誰もこぼれ落ちないように」というテーマ設定があって。障害のあるなしに関わらず、全ての人に向けたものにしよう、いろいろな要素の全部を活かしていこうという方針でした。それは、これまでの僕の仕事の考え方とは全く違う発想ですよね。だから、そのときに自分の培ってきた経験や、実績や、自信は捨てないとできないと思いましたね。実際に、そうすることで新しい視野を獲得（かくとく）できたと思うし、映像制作の可能性はまだまだあるんだなと気づかされた仕事でした。

「TURN」から「Creative Well-being Tokyo」へ

櫻井　ここまで伺ってきた「TURN」での経験を経て「Creative（クリエイティブ） Well-being（ウェルビーイング） Tokyo（トーキョー）（以下、CWT）」の事業へと発展していきます。「CWT」では、文化施設の事業担当者に向けた研修動画の制作を行いましたよね。

畑さんはこの研修動画の制作でも企画設計を担われていましたが、もともとの企画のアイデアの発端、経緯はどういったものだったのでしょうか？

畑　「CWT」は美術館や劇場といった文化施設のアクセシビリティの向上

第12回 TURNミーティングの様子。
（撮影：金川晋吾）

自分の培ってきた経験や、実績や、自信は捨てないとできないと思いましたね。

を目指すもので、この研修動画の制作は２年目の取り組みでした。公益財団法人東京都歴史文化財団の職員を対象とした情報保障やアクセシビリティの研修を行うことになり、まずはどういうアプローチで、何を伝えるものにするかをとても悩みました。情報保障というと一般的には、手話通訳や文字支援といった手法が浮かぶ方も多いと思います。そうした具体的なことも必要ですが、もう少し「意識」の部分の情報保障やアクセシビリティを伝えていけるような研修にできないかと考えました。

というのも、オンラインで実施した「TURNミーティング」でも、一つの情報保障の在り方を提案しましたが、やはりコストがかかるんですよね。丁寧にやればやるほど予算が必要になってくる。でも、わたしのなかでは「情報保障やアクセシビリティはお金がなければできないのか？」という問いがずっとあって。もちろん予算も大切ですが、一人ひとりの行動の変化やサポートの仕方によって、繋いでいける関係があるんじゃないか。そうした情報保障やアクセシビリティの意識について、みんなで考えられないだろうかと思ったんです。だから研修動画では、見た人が自分ごととして考えられるきっかけをつくりたいという思いが強くありました。

櫻井　なるほど。アクセシビリティの意識を耕していくような内容を目指していたんですね。では、研修動画の内容についても教えていただけますか？

畑　今回の研修動画は、NPO法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク（以下、TA-net（ターネット））発行の『観劇サポートガイドブック～視覚・聴覚障害者編～（2020年改訂版）誰もが楽しめる劇場づくりをめざして』という冊子をベースに制作しています。この冊子には、「チラシ・公演情報を知る」「予約をする」「当日、劇場に行く」「劇場の受付で」「劇場の中で」「客席に行く」「上演中」「終演後」といったシーンごとに、どのような対応が必要か、劇場でのアクセシビリティや情報保障の在り方に関する情報が丁寧にまとめられています。この冊子の内容を映像化することで、情報保障やアクセシビリティについて、より具体的なイメージを持って伝えることができるのではないかと考えました。TA-netにもご相談して、ご快諾いただき、動画制作は二瓶さんをはじめSETENVのみなさんと相談しながら進めていきました。

櫻井　この動画は、財団職員全員が受ける悉皆（しっかい）研修という位置付けで、かなり大規模な取り組みでしたが、実際の制作体制にはどれくらいの人が関わっていたのですか？

畑　総勢30名ほどです。出演者が約11名、ナレーションや情報保障チームが約５名、情報保障やアクセシビリティの監修者、撮影チーム、そして撮影の会場としてご協力いただいた東京文化会館のスタッフなど、たくさんの方々にサポートしていただきました。

制作の現場は映画づくりのような状況でしたね。動画を見た人が、こういったシーンが起こったら自分はどのようなことができるかをイメージできる設定を考えて、動画を構成していきました。

自分ごととして情報保障を考えるために

櫻井　二瓶さんは、この研修動画の制作において工夫した点、あるいは現場での発見は何かありましたか？

二瓶　主に動画の構成と撮影で留意したことがあります。まず、研修動画として、当初、あまりにもお勉強的な要素が強いなと感じていました。マニュアルのような性質を持つものではあるけれど、情報保障やアクセシビリティをやらなければならない、といった押しつけのようになってしまわないかという危惧があったので、畑さんたちと意見交換を重ねて進めましたね。

「TURN」の取り組みを通して、当事者が抱えている憤りや不満、やるせない思いといった事実を知ったとき、僕自身も意識が変わっていったという経験があったので、この研修動画を見た人が、情報保障やアクセシビリティに取り組もうとする「動機づけ」みたいな要素が必要だと思いました。つまり、思いやりみたいなものが、情報保障の基盤になるということがわかる映像にしなきゃいけないと感じていました。

撮影にも、「TURN」での学びが活かされています。手話で話すときは、その人の表情や身体そのものが情報になるんですよね。だから、出演者が二人で会話している場面では、例えば、ワンカットの広い画（え）に二人が映るようにして、話し手、聞き手の反応が見えるように意識して撮影しました。映像業界の用語で「切り返し」といって、一人が話して、次のカットでもう一人が話しているという、画面に一人ずつ映るような編集・撮影方法がありますが、おそらく今回の研修動画では、その撮影方法は1箇所だけじゃないかな。基本的には、出演者の身体全体が見えるように撮影していました。実は、画角を広く取る理由はもう一つあって。それは「東京文化会館」という、建築家の前川國男（まえかわくにお）による素晴らしい建築空間で撮影していることも伝えたかったからです。文化芸術に関わる人が見る研修動画として、それは訴求効果が高いと思ったんですよ。財団職員にとって馴染（なじ）み深い文化施設で撮影をすることで、リアリティも伝えられるかなと。最近の映像は、背景がフワッとぼやけている映像が流行していますが、この研修動画では、背景や空間が見える撮り方を意識しましたね。

櫻井　今回の研修動画の制作において、「TURN」のときから更新された考え方や、情報保障への向き合い方に変化はありましたか？

畑　わたしも二瓶さんが仰っていたように「押しつけ」のような姿勢ではなく、動画を見た人が気軽に楽しみながら、日常の延長線上で情報保障やアクセシビリティについて考える機会になってほしいと思っていました。これは、映像の力の一つだと思うんですが、研修動画を見たときに「自分だったらどうするか」というイメージを持ってもらえる、体感できるようなものになったと思っています。制作現場では「あのシーンって、あるあるの事例だよね」と和気あいあいと話したり、相談しながらつくっていたので、その現場の雰囲気が映像にも出ているのではないかなと思います。

研修動画を見たときに「自分だったらどうするか」というイメージを持ってもらえる、体感できるようなものになったと思っています。

あと「重くならないように」ということは、二瓶さんたちと共通して意識していたことですね。日常生活のなかで、情報保障やアクセシビリティの課題はたくさんあって、当事者にとっては大変で苦しいことも多いのが現実です。でも今回の動画制作では「実はこんなことがあるんだよ」という当事者の経験を重くならない雰囲気で映像にすることができた。映像の力を借りながら、情報保障やアクセシビリティへの意識を堅苦しくないかたちでひらいていく。いろいろな立場の人と一緒に考え制作する機会で、学びも多かったですね。

櫻井　二瓶さんも話していた通り、東京文化会館での撮影は、この動画の肝なのかなと感じていました。我々職員にとっては、仕事の現場であり、日常でさまざまな人と出会う場所の一つだったので、映像を見ながら追体験するような感覚になりやすい。今度はこうやってみようと、具体的にイメージを膨らませられる。それはこの研修動画の特性でもありますね。実際に職員の方や制作関係者から、研修動画に対する感想などはありましたか？

畑　職員の方からは「自分にも少しできるかもしれないと思った」「もう少しいろいろな人と一緒に考えてみたい」といった感想をいただいたので、自分ごととして情報保障やアクセシビリティを考える一歩を後押しできたのかなと感じています。

また、東京文化会館では情報保障をつけた公演や企画も開催しているので、その視点から職員の方からご意見をいただき撮影に反映しました。使っていた台本もご覧いただいて「今後こういうことに取り組めるといいね」「こういうところも大事なんだ」と、お互いに気づきを共有し合える現場でしたね。実際の文化施設で働く人々と一緒に動画制作に取り組むことで、今後の施設の情報保障やアクセシビリティに繋がる一歩にもなったかなと感じています。

櫻井　情報保障やアクセシビリティを考える上で、現場での体験と同時に、学び、知ることも必要だなと感じています。研修動画をご覧になった職員の方々から「次はもっとこうしてみよう」といった発想が出てきたと聞いて、これからも「学びの機会」を継続してつくっていくことが大事なんだと思いました。

東京文化会館での撮影の様子。

大切なのは、思いやりのようなものが刻印されているかどうか

櫻井　動画制作では、収録した素材を編集し、ある程度の尺にしてから配信して情報が拡散されていきます。映像の効力がある一方で、公開・配信したら、基本的にはつくり直せないというリスクや危うさみたいなものを、わたし自身、動画制作の企画に関わるなかで感じています。二瓶さんは、こうした「動画」を世に出していくことに対して、何かお考えはありますか？

二瓶　やっぱり正解はないと強く自覚しておく必要があると思います。自分も含めて、関わる人が変われば、その表現も間違いなく変わる。そういう曖昧さが映像にはあると思いますね。

それから、映像に込められた情報は確実に古くなる。でも、それは仕方ないことです。じゃあ何が大事なのかというと、多様な物・事・人に対する目配りであったり、思いやりのようなものがその映像に刻印されているかどうかだと思います。それが、その映像の価値だったり、耐用年数に関わると思うんですよね。今回の研修動画も、映画やドラマのように何年経っても見られるものを意識してつくっていました。

それから、今回の研修動画では、良かった点と大変だった点が同じで。実は、関係者のみなさんほぼ全員に、動画をチェックしていただきました。これはある意味で苦行なのですが、みなさんに見ていただいて、そこで出た意見をほぼ反映するということをやっていたんですね。だからこそ、情報や内容の精度も非常に高いものになっている実感はあります。

櫻井　ここまでのお二人のお話を伺いながら、ともに考えていく姿勢を発信していくことが文化の基盤をつくっていくのかなと感じました。他者の文化に触れていくことは、やはりセンシティブで慎重にならなければならない部分があり、文化事業の現場においても不安を持つ方々も多いと思うんです。そうしたなかで、どうやってともにつくっていくことができるのか。どうすればフラットな関係で一緒に考えていくことができるのか。そうした企画づくりの「姿勢」が大事なんだとあらためて思いました。

悩み、考える「余白」を模索し続けたい

櫻井　文化事業は社会に対して問いを投げかけていくものだと思いますが、ここまでのお話では、悩んで考えていく余白をどうやって企画のなかにつくっていくかというところが、トピックの一つだったと思います。ここまでのお話を振り返りつつ、畑さん、二瓶さんのご自身の今後の活動について、展望や可能性をお聞かせいただけますか？

畑　情報保障やアクセシビリティにおいては、言論の危うさやグレーで曖昧な部分があることも忘れてはいけないし、大切な視点だと思っています。だから、これからも考え続けていきたいですね。何か正解を探すということではなく、いろいろな手法やアウトプットの在り方を模索し続けることが大事なんだと思っています。だって、100人いたら100通りの情報保障の在り方があるはずだから。わたしも含めて、企画のつくり手になる人は、なるべくいろいろな人に出会い、ともに制作することを通して、身体的に体感するのが大事だと思います。言語的にもいろいろな言葉を交わし、視点をすり合わせていくことでお互いの違いに気づく。価値観の異なる人同士が一緒に何かをやるには時間が必要なんだということを、みんなの前提にできることが、一つのアクセシビリティの理解に繋がると思っています。

あとは、みんなが意見を言いやすい現場をつくりたいですね。それは企画者もだし、情報保障に携わる人、撮影の方や繋ぐ先の当事者の方も。実はみなさん遠慮されていたり、職能から紐づいて言うべきじゃないと思っていることもあるので。それぞれの立場は尊重しつつも、新しいことをやっていくには意見を言いやすい環境が大事だと思います。そうしたことへの共通理解が、いろいろな人との取り組みを通して広がっていくといいなと思っています。

二瓶　僕が情報保障に興味関心を持つきっかけになったのが、テレビ番組に小さくつけられた手話通訳のワイプ表示に対する意見でした。手話通訳を必要としている人にとっては、非常にアンフェアなものだと感じていること、出演者と対等かもっと大きくわかりやすく表示されていないとフェアではない、という話を聞いて。そんなふうに感じているとは知らなかったから、本当に驚いたんですよね。僕はメディアの業界にいた時間も長いので、これまで何も意識していなかったことに対して「あっ！」と思わされることがあって。それをきっかけに、自分の意識も変わっていきました。

ここ最近、これまでだったら絶対変わらなかったテレビや映画といった大きなメディアでも、情報保障やアクセシビリティの変化が起こっていますよね。まだまだ変わっていく可能性は大いにあるんじゃないかと思います。そういう領域に僕自身も片足を突っ込んでいるわけですから、何か少しずつでも変化を起こし貢献していけたらなという思いを持って、これからもやっていきたいです。

櫻井　自分と異なる他者と出会うとき、ディスコミュニケーションが現場では起こりますが、そういうことも含めてコミュニケーションなんだと思います。それが企画づくりの醍醐味でもありますよね。今回は、オンライン化や動画制作のお話を伺いましたが、多様な立場の人々と意思疎通を図り、一緒に進める姿勢という、どんな企画にも共通する視点をいただけたように思います。ありがとうございました。

収録日：2023年9月27日
手話通訳：瀬戸口裕子、加藤裕子、石川ありす

何か正解を探すということではなく、いろいろな手法やアウトプットの在り方を模索し続けることが大事なんだと思っています。

めとてラボ

誰もが「わたし」を起点にできる
場をつくるアートプロジェクト

ABOUT

異なる身体感覚や思考を持つ人と人、
人と表現が出会う場やコミュニケーションを模索する

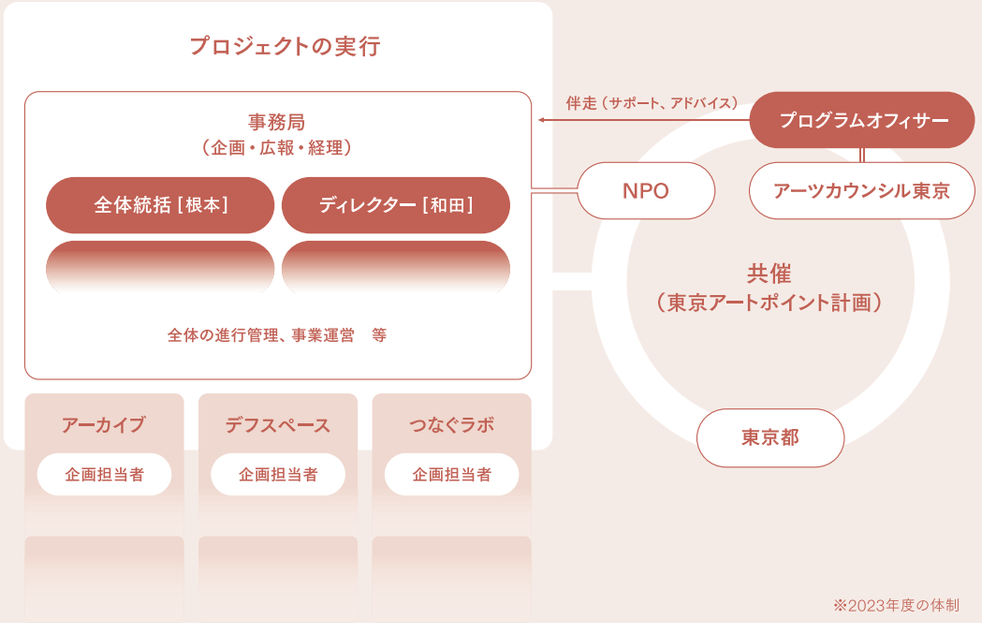
視覚言語（日本手話）で話すろう者や難聴者、ろう者の両親をもつCODA（コーダ）、聴者たちが協働して展開するアートプロジェクト「めとてラボ」は、東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、一般社団法人ooo（オオオ）による共催事業「東京アートポイント計画」の一環として2022年に活動を開始しました。コンセプトは「わたしを起点に、新たな関わりの回路と表現を生み出す」こと。一人ひとりの感覚や言語を起点とした「創発の場＝ホーム」をつくることを目指し、目と手で語らいながら幅広いリサーチや実験を行っています。

手話は視覚を、音声言語は聴覚を起点とすることもあり、コミュニケーションにおける対話のリズムや重なり方、空間の使い方などにさまざまなズレが生じます。このズレを意識し、接続するために、手話通訳の現場においてどのような条件、進め方が必要なのかを探究する企画「つなぐラボ」をスタート。手話通訳者だけではなく、さまざまな言語間の通訳者、翻訳者にヒアリングを行い、ルールやツールの開発に向けて検証を進めています。また、暮らしのなかにある手話をどのように継承し、保存していくのかという観点から、手話の記憶や記録を「アーカイブ」するための企画にも踏み出しました。そのはじまりとして、ろう者の家庭で撮影されたホームビデオの鑑賞会を実施。ろう者の自然な姿や会話のやりとりの様子を見ながら、めとてラボのメンバーや参加者が語り合う会をひらいています。

そうしたさまざまな活動の基盤とするべく、拠点づくりにも力を入れています。「ろう者の身体感覚や手話言語からなる、会話空間を起点とした空間設計があるのではないか」という視点から、アメリカにあるろう者のための大学、ギャローデット大学の取り組みから生まれた「デフスペース」に着目。国内にあるデフスペースを再発見するべく、拠点や文化施設、各地域のろうコミュニティを訪れ、場づくりのイメージを膨らませてきました。そして2023年には東京・西日暮里に、異なる身体性や感覚世界を持つ人々とともに新たなコミュニケーションの在り方を探求する拠点「5005（ごーまるまるごー）」での活動もはじめます。

自らの身体や言語を見つめ、それに合う空間を設計していくことは、「わたし」、そしてコミュニケーションを交わす「わたしたち」という存在を肯定するプロセスでもあります。今回の座談会では「めとてラボ」の全体統括を担う根本和徳さんと、ディレクターを務める和田夏実さんに、アートプロジェクトとして活動をはじめるに至った経緯や、それぞれの感覚を起点にチームを動かす際の心がけ、今後の展望について話を伺いました。

体制図



※2023年度の体制

事業の枠組み

- アーツカウンシル東京が実施する、NPOとともにアートプロジェクトに取り組む「東京アートポイント計画」事業の一環として実施。

役割・特徴

- アートプロジェクトの専門スタッフ・プログラムオフィサーが伴走し、企画運営に関するサポートを行う。
- プロジェクトの運営、ディレクション、広報、会計などは事務局が中心となって動かしていく。
- 各企画には、それぞれ個別に担当者が組まれ、進行管理から本番の運営、外部とのやり取りなどを割り振り。
- 月に２度から３度の定例会議を開催し、企画の進捗や懸案事項、相談、気づき、体験談などを共有。

プロジェクトの開始当初は少人数のチームであったが、企画やメンバーが増えるにつれ、全体の進行を把握する事務局機能を拡充した。現在は根本や和田が中心となり、プロジェクト全体の進行を管理している。個々の企画には必ず担当者が立ち、主体的な進行を担う体制づくりに取り組んでいる。

これまでの活動

2020年7月

東京アートポイント計画の事業「Tokyo Art Research Lab（TARL）」において、異なるコミュニケーション方法や身体性をもつ人々の出会い方や伝え方を考える参加型プログラム「共在する身体と思考を巡って」を実施。南雲麻衣（パフォーマー）、加藤甫（写真家）、和田夏実（インタープリター）がナビゲーターを務め、声や文字、身体などあらゆる方法でコミュニケーションを試みるワークショップや、専門家へのヒアリングなど、約6ヶ月にわたり、14名のメンバーが実験を繰り返した。

2021年8月

TARLにおいて、プログラム「わたしの、あなたの、関わりをほぐす」を実施。岡村成美（デザイナー）と和田夏実がナビゲーターを務め、その人らしさをそのままかたちづくる方法について、ゲストを含め約20名のメンバーで考えた。成果発表の場として高田馬場「BaBaBa」にて展覧会『happening.』を開催。

2022年2月

「東京アートポイント計画」が都内でともにアートプロジェクトに取り組む新規パートナーを公募。和田はそれまでの経験を踏まえ、自分自身のなかにある言葉の豊かさや文化を大切にできる場づくりを目指すべく、根本たちと相談しながら事業を計画し、応募に踏み切る。

2022年3月

東京アートポイント計画の2022年度共催事業新規パートナーに採択。その後、一般社団法人ooo（オオオ）として、東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京とともにプロジェクト「めとてラボ」を開始する。

2022年6月

目と手で紡がれていく言語や文化、歴史を継承していくための新たな手法を考えるために、全国各地にあるさまざまな文化拠点や取り組みのリサーチを開始。根本の生まれ育った福島にある「はじまりの美術館」、「福島県立博物館」、「西会津国際芸術村」、「コミュニティカフェEMANON」、さまざまなろう者が集う長谷川俊夫さんの自宅を訪問した。

2022年8月

手話という言語からなる身体感覚をもとに、ろう者が過ごしやすい環境が設計された空間である「DeafSpace（デフスペース）」研究の一環として、長野県にあるろう者の両親とCODAの３人家族が住む家をリサーチ。

2022年11月

国内リサーチとして、愛知の「NPO法人つくし 聴覚・ろう重複センター」による事業所、名古屋の港まちにある「港まちポットラックビル」、情報収集・情報発信の拠点「アートラボあいち」、繊維の町の繁栄を見つめてきたレトロビル「Re-TAiL（リテイル）」を訪問。

2022年11月

手話で対話する日常をアーカイブする方法を探るべく、ホームビデオなど映像メディアとアーカイブに関する活動を行う東京アートポイント計画のプロジェクト「移動する中心｜GAYA」事務局にヒアリング。

2023年2月

めとてラボに関わるメンバーが集い、ろう者の家庭で撮影された「ホームビデオ」の鑑賞会を実験的に行う。ろう者の自然な姿や会話のやりとりの様子を見ながら感想や発見を共有。

2023年3月

めとてラボの1年の活動をまとめるパンフレット『めとてラボ2022 - 活動レポート - 』を制作、TARLウェブサイトで公開。

2023年9月

参加型イベント「井岡さん家のホームビデオ鑑賞会～めとてで紡がれる文化を探る～」を開催。ろう者の家庭で撮影された「ホームビデオ」を鑑賞し、気づいたことや想像したことを言葉にしながら残していく場をひらいた。

2023年11月

拠点「5005（ごーまるまるごー）」にて活動を開始。

座談会

「わたし」を起点にする アートプロジェクトをつくる

根本和徳
ねもと かずのり

手話が第一言語の環境で生まれ育ったネイティブサイナー。特別支援学校教員として働く傍ら、福島県二本松市にある「カメヤ書店」に書棚「ネギ書店」を持ち、SNSでお薦めの本について発信している。めとてラボのプロジェクトメンバーとして初期から参加、現在は全体統括を担う。手話による対話から生まれる表現や空間を日々追求している。（写真左）

和田夏実
わだ なつみ

インタープリター。ろう者の両親のもとで手話を第一言語として育ち、大学進学時にあらためて手で表現することの可能性に惹かれる。視覚身体言語の研究、さまざまな身体性の方々との協働から感覚がもつメディアの可能性について模索。めとてラボではディレクターを担うほか、コミュニケーションゲーム『LINKAGE』など、ことばと感覚の翻訳方法を探るゲームやプロジェクトを展開している。（写真中央）

小山冴子
おやま さえこ
［モデレーター］

アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー。これまで、オルタナティブスペースの運営や自主レーベルの活動、各地の芸術祭やアートプロジェクトの運営などに携わる。2019年からは札幌文化芸術交流センターSCARTSにて現代美術の展覧会の企画や作品制作のコーディネートを担当。2022年4月より現職。中間支援の立場から東京アートポイント計画「めとてラボ」に伴走する。（写真右）

参考 URL

めとてラボ 事業紹介ページ
（Tokyo Art Research Lab ウェブサイト）

めとてラボウェブサイト

めとてラボ 2022 ―活動レポート―
（Tokyo Art Research Lab ウェブサイト）

めとてラボのはじまり

小山　「めとてラボ」をはじめるにあたって、お二人にはどのような課題意識や関心があったのでしょうか？　まずは活動の背景や経緯を教えてください。

根本　わたしは福島県生まれで、ろう者の両親のもとで手話で育ち、小学校1年生から高校3年生まではろう学校に通いました。その後、大学進学で千葉へ。そこでたくさんのろう者の友人と出会い、さまざまなろう者がいることを知りました。和田さんのことはずっと前から知っていたのですが、ちゃんと出会ったのは「めとてラボ」をスタートする1、2年前くらい。ちょうど、新型コロナウイルス感染症の拡大がはじまった頃でしたね。

当時、わたしは、自分が読んだ本を手話で紹介する動画をつくって発信する活動をはじめていました。そうした活動を通して、手話について考える時間が増えていくようになったんです。

和田さんとは、手話について考えたこと、さまざまなろう者がいることなどを話したりしていました。お互い考えていることに共感することも多く、そこからさらに昇華（しょうか）させていき、「めとてラボ」の活動に繋がっていったのだと思います。

和田　わたしは長野県生まれで、実家は、両親が10年かけて工夫しながらつくった建物です。我が家は、国内外からさまざまな人が訪れる家でした。かれらと触れ合うなかで、それぞれの国の文化、手話を通して見えてくる文化があるのだと、こどもの頃から体感していました。その記憶がずっと自分のなかにあったんです。大学生の頃に、目で見たもののかたちや動きから生まれる手話という言語が非常に面白いなとあらためて思って、どうしてこんなに面白いのか、どうすればこの面白さを他者と共有することができるのだろうかと考えるなかで、アートに出会いました。

また、わたしは手話通訳としても活動しています。通訳・翻訳には、さまざまな方法があると思うんですが、手話だけではなく、いろいろな翻訳の方法、表現方法を試行錯誤するなかで、まず手話での対話の場が必要だと感じました。これはどうかな？と疑問がわいたときに、一緒に考えて話し合えるような、安心してみんなのなかにある感覚を持ち寄れる場が必要なのではないか。そんなことを、毎月、根本さんと会って、考えたり話し合ったりしていましたね。

小山　和田さんは、コミュニケーションをテーマに、ゲームをつくったり、展示をしたり、パフォーマンスに関わったりと、ご自身でも表現活動をされてきました。そこに通底するの

は、やはり手話で育った自分というものがあった、ということなんですね。

根本さんは、コロナ禍にはじめられた本を動画で紹介する活動を通して、あらためて手話の面白さを再認識されている。

手話は、話し手のイメージが、目の前に立ち上がるような言語だなと感じています。そうしたイメージを扱う言語の面白さに、和田さん、根本さん、それぞれが、あらためて気づきだした。そのタイミングで二人が出会い、対話し、手話や自分たちの持っている文化を捉え直し、コミュニケーションを重ねながらつくっていこうと「めとてラボ」の活動がはじまっているんですね。“め”と“て”というプロジェクトの名前も、「目で見る」ということと「手を使う」ことを象徴した名前ですね。

和田　そうですね。あと、2021年に取り組んだTokyo Art Research Labの現場*1へ、根本さんに来ていただいたことがありました。以前、アーツカウンシル東京が運営していた「ROOM302」という場所には、全国各地のさまざまなアートプロジェクトの本が本棚にびっしり並んでいました。それらの本を根本さんと見ながら、生活や文化を再発見することができるいろいろな事例があることを知り、アートプロジェクトの取り組みは、わたしたちが考えていることに近いんじゃないかと話していたんです。

その後、東京アートポイント計画への応募を視野にいれるようになって、誰と一緒にやろうかと考えたとき、一番最初に頭に浮かんだのが根本さんでした。根本さんとだったら、生活や歴史、過去から受け継いできたものを共有しながら、新しいものを一緒に考えられるんじゃないかなと思ったんです。

根本　わたし自身は、アートやアートプロジェクトについて全く知らなかったんですね。でも、和田さんと話したり、いろいろなところに連れて行ってもらったりして、全国各地に文化拠点があること、さまざまな方法があることを知り、自分にとっても得るものがたくさんありました。そうした気づきや学びを、ろうコミュニティにももっと還元できると良いのではないかと思ったんです。そんななかで「めとてラボ」というアートプロジェクトをはじめるのはどうか、と和田さんに誘われたことを覚えています。

手話で表した「め（写真上）」と「て（写真下）」。

*1
2018年度~2021年度に実施したアーツカウンシル東京によるプログラム「東京プロジェクトスタディ」の一つ。“東京で何かを「つくる」としたら”という問いのもと、アーティストやクリエイターなどさまざまな実践者がナビゲーターを務め、公募で集まったメンバーがチームとなり、スタディ（勉強、調査、研究、試作）を実施した。
https://www.tokyoprojectstudy.jp

kazunori nemoto YouTubeチャンネル　2023年11月17日配信
【手話】今井むつみ・秋田喜美 著『言語の本質ーことばはどう生まれ、進化したか』（2023）中央公論新社

『SHAPE IT!』制作：異言語Lab.

『たっちコースター』制作：magnet　Photo：Masaharu Arisaka

「自然な文化を耕せる場所にしたい」という考えが最初にありました。

1年目の実感、出会い、繋がりの先で見えてきた風景

小山　実際に「めとてラボ」の活動をスタートしてみていかがですか？　1年目はリサーチなどをしながら自分たちの活動方針を探り、共有し、見出していった年だったように感じています。福島、愛知、長野などへリサーチへ行き、その地域のろうコミュニティや芸術文化関係者に出会ったり、そうした出会いを通して次の企画のきっかけを見つけたりと、ネットワークがアメーバ状にどんどん広がっているのが特徴的だと感じています。また、プロジェクトの立ち上げ当初は4人くらいだった運営メンバーが、最近さらに増えましたよね。1年を経て、現在感じていることなどを聞かせてもらえますか。

和田　「めとてラボ」は、「自然な文化を耕せる場所にしたい」という考えが最初にありました。だからリサーチのときにも、「自然」「0（ゼロ）からつくる」ということをテーマに決めて、どこに行こうかと話し合いました。

根本　「自然な文化」のイメージとして、わたしのなかにぱっと浮かんだのが、福島にある恩師の長谷川俊夫先生のご自宅の風景だったんです。それが、まずはじめに福島へリサーチに行った理由でした。

和田　長谷川先生のご自宅は、年齢もさまざまなろう者が集まってくるとてもオープンな雰囲気でした。家のなかでは手話が飛び交っていて、まさに「自然な対話の場」という感じで。「めとてラボ」のメンバーと訪れたときも、そういった手話の空間、手話での対話の場をみんなで体感することができたんです。とても印象的でしたね。

「めとてラボ」のメンバーのなかにアートマネージャーの嘉原妙（よしはら たえ）さんという方がいて、福島県内の美術館やアートの活動拠点を繋いでくれました。そうして出会った人々と、その後、根本さんがトークやワークショップの企画をご一緒する機会が生まれたりもしましたよね。

根本　そうですね。リサーチでは、長谷川先生のご自宅のほか、福島県内の美術館、アートにまつわる活動に取り組む団体や拠点を見学し、お話を伺いました。これまで福島で暮らしていたのに、全然知らなかったものごとに気づかされた経験でしたね。アートという知らない世界に導いてもらえたという感じです。

　それから、リサーチには必ず手話通訳の方々がいました。だから、ヒアリングの内容をより理解することができたし、リサーチの間はメンバーといろいろな話をして、そこから、新たな問いや課題が見つかっていきました。

和田　福島のリサーチを経て、「めとてラボ」の拠点の在り方のイメージが見えてきた印象もありましたよね。長谷川先生のご自宅のような拠点があって、そこからいろいろなところに出向いて行って、出会い、そこで何かが生まれる。そしてまた家に帰ってくるというような。ふんわりとですが、そんなイメージが浮かびました。

根本　その次に愛知や長野にもリサーチに行きました。長野の和田さんの実家は、1階と2階が吹き抜けになっていて、別々の階にいてもアイコンタクトをとりながらコミュニケーションができる空間づくりがされていますよね。

和田　長野の実家は、ろう者がスムーズに会話ができる空間設計を両親が一生懸命考えながらつくったんです。こういった空間を「デフスペース[*2]」といいます。愛知へリサーチに行った際に、ろう者のグループホームを訪問したのですが、そこも1階と2階が吹き抜けになっていたり、手話で会話しやすい空間が設計されていて、実家以外でこうした空間を見たはじめての経験でした。

　そのほかにも「ホームビデオ」の上映会を行いましたね。「めとてラボ」のメンバーの実家にあった8ミリフィルムをみんなで鑑賞したのですが、その映像には、デフファミリーの会話の様子や年中行事などの記録が残されていました。それを見ながらメンバーと対話していると、自分のなかにある体験の記憶に気づかされるんです。歴史や文化、自分自身のアイデンティティをあらためて発見するような体感があって。「あ、同じなんだ！」と感じることって、意外といままでなかったんですよね。こうしたリサーチや活動を重ねながら、似たような記憶や経験が「あ、あそこにもある！」と、メンバー同士で共有・共感していった1年間だったと思います。

根本　こうした活動を少しずつ進めるなかで、一緒に活動したいという人がだんだん集まってきました。

和田　わたしや根本さんが声をかけて参加したメンバーもいますが、興味があるのでやってみたい！と言ってくれる人たちが周りにはたくさんいるんです。そうした気持ちを秘めている人たちが「めとてラボ」に集まっていますね。

根本　メンバーも増えていくなかで、どのように情報共有するのかという課

*2
アメリカにあるろう者のための大学・ギャローデット大学の取り組みから生まれた概念。お互いの目を見て会話をするための吹き抜け構造や、部屋の照明を点灯させることで合図できるような設計などさまざまな工夫がある。

福島県の猪苗代町にある「はじまりの美術館」へのリサーチの様子。

福島県のリサーチで訪れた、長谷川俊夫さんのご自宅。（撮影：齋藤陽道）

めとてラボの関係者と実施したホームビデオ鑑賞会。（撮影：加藤甫）

題も出てきた1年だったと思います。だから、メンバーを置いてきぼりにしない、ということにも気をつけています。

自然に、安心して表現できる「ホーム」をつくる

根本　先ほども「自然」というキーワードが出ましたが、目で見て、身体（からだ）で表現するということが、自分たちのなかでは当たり前にあるんですね。いままでもごく普通にそうやって暮らしてきて、自分たちの身体のなかに保ってきたものとしてあるんです。

最初、この感覚を他の人に伝えることができるものなのか、わかりませんでした。でも「めとてラボ」のなかで出してみたら、意外と同じような経験、感覚をいろいろな人たちが持っていることに気づくことができた。一方で、自分の考えや感覚を理解してもらえるかどうかわからないし、そうしたことを安心して話せる場所がなく、我慢してきたこともあるなとあらためて思いました。

だからこそ「めとてラボ」では、一人ひとりの感覚や言語を起点とした「創発の場」、つまり「ホーム」をつくることを目指しています。「目」と「手」から生まれる家というか、それぞれ持っているものは違うけれど、安心して集まれる場というのかな。

和田　本当に言葉にするのはすごく難しいんですが、これまで大きな歴史

メンバーのなかに、リサーチ先の場所に、そして自分自身のなかに、歴史や文化があるということを実感できて本当にわくわくしています。

やメディアのなかでは見つけられなかった経験や文化、身体性といったものが、実は既にみんなのなかにあるんですよね。今回「めとてラボ」をはじめてみて、メンバーのなかに、リサーチ先の場所に、そして自分自身のなかに、歴史や文化があるということを実感できて本当にわくわくしています。この発見をこれからゆっくり時間をかけて、耕していきたいですね。これがどこに繋がるのかな、どこに行くのかな、とわくわくしています。

根本　そうですね。耕し方というのも自分たちだけでは限界があるので、デザイナーや専門家といったさまざまな技術を持っている人たちと話し合っていくことが必要になります。そうすると必ず手話通訳も必要になる。そうしたやりとりが必要だということも、この1年間でわかりましたね。

小山　「ホーム」という言葉について、正直に言うと最初はあまり意味を掴（つか）みきれずにいました。でも、リサーチや対話を繰り返しながら動いている「めとてラボ」の様子を見ていて、だんだんと掴めてきたような気がします。安心して自分のなかにあるものを出せる場所としての「ホーム」をつくり、育んでいく活動として「めとてラボ」がある。リサーチを通して、自分たちにとって何を大事にしていきたいのか、という活動の軸を徐々に発見し、掴んでいった1年間だったんだなとあらためて思いました。

和田　もうひとつ言うと、「めとてラボ」では身体や視覚言語を大切にしています。それと同時に「わたし」からはじまるということも、とても大切にしています。感覚や身体、言語などは一人ひとり異なりますよね。そうした違いも肯定して、安心して自分自身を出せる場所をどうやってつくっていくことができるのか。アウェイではなくホームというか、安心してともにいられる場所というのかな。「めとてラボ」にとって大切なイメージを見つけることができた、これが1年目の大きな発見でしたね。

湧き出てくる何かを「待つ」

小山　現在、メンバーは16名と増え、同時進行でさまざまな企画を走らせています。メンバーの職業や背景も多種多様ですね。あらためて、メンバーとのコミュニケーションで気をつけていることや、「めとてラボ」としてこんなチームにしていきたい、という目標はありますか？

根本　わたしは「待つ」ということを意識しています。それぞれ人生経験も、持っている知見も異なりますし、一人ひとりの内側にある何かが出てくるのを待つことが、とても大切だと思っています。誰かと出会って、触発されて、その人のなかから何かが生まれるかもしれない。実はやってみたいことはあるけど、まだ内に秘めている人もいるかもしれない。こうした、その人の内側から湧き出てくるものがあると、その人のパーソナリティを理解していけますよね。わたしは全体統括という役割でもあるので、全体も見つつ、一人ひとりのことを見守りながら「待つ」ことを大切にしていきたいです。

立ち上げ当初は4人だけでスタートしましたが、それぞれに興味関心を持って集まってきたメンバーがいるので、だんだんと企画も規模も大きくなってきました。いまいるメンバーを見ても、2年前のかれらとは違っていて、大きな変化が起きているなと感じています。

和田　わたしの場合は、「推し活」っていうのかな。もともと自分の性格的に、その人のなかにある何か素敵なものを発見するとすごく嬉しいんですよね。「あ！こんな素敵なものがあった！」と、それがすくすくと育って花が咲いたらどうなるのかな、その後を見たいな、という思いがいつもあります。そこは、たぶん根本さんの「待つ」という意味合いと同じですね。

それから、アートプロジェクトとして「めとてラボ」は、いい意味で、いろいろな影響を受けやすいと思っています。たくさん「栄養」を受け取れると言ってもいいかもしれません。特に地域の芸術や市民参加型の取り組み、そうした活動をしている人々との出会いを通して、文化の耕し方を知ったりする。そして、あらためて自分たちが持っている文化のありかに気づいていくというか。

根本　いまの和田さんの手話表現が、まさにわたしの頭のなかに浮かんでいたものと一致しています！（笑）

和田　なるほど！　自分のなかから出てくるものを待つということ。そして、いろいろなところに動いて行って、出会い、そのなかで同じ景色を見て、つくって、体験して、その後、自分たちを振り返って考えていく。そうしたことを繰り返しながら「めとてラボ」を発展させていきたいですね。次は、どんな景色が見たいかな？と話し合って進んでいくような感じがしています。

いまの和田さんの手話表現が、まさにわたしの頭のなかに浮かんでいたものと一致しています！（笑）

肯定することからはじまるアートの面白さ

小山　「めとてラボ」は、東京都とアーツカウンシル東京との共催事業「東京アートポイント計画」の一環として取り組んでいます。単発のイベントや勉強会で終わるのではなく、複数年をかけて継続して進めていくアートプロジェクトだからこその気づきや実感などはありますか？　また、アートプロジェクトとして取り組むことに、どんな期待を持っていますか？

和田　アートプロジェクトは、きちっと固めていくのではなく、一つひとつ皮を剥くように、その人のなかにある何かを柔らかく取り出してみて、一緒に面白がりながら遊ぶことができるんじゃないかと思っています。その人の、そしてみんなのなかの自然なもの、気づき、湧き出てきたものを肯定し、育てていけるというのが、アートの面白さだと感じています。わたしの祖父母が画材屋をやっていたり、母も美大を卒業していたり、家のなかで絵を描くという文化があったこともあり、アートは昔から本当に好きでした。大学に入ってからさらにアートに関わるなかで、やはりアートは心のなかから湧き出てくるもの、心に火がつくみたいな感じだなと思うようになりました。

　それから「アートポイント」という名前もすごくいいなと思っています。いままであったいろいろな出来事や経験がポイントとなって繋がり、そこでまた何かに出会える、というようなイメージがありますね。

根本　最初、東京アートポイント計画について、イメージがあまり持てなかったんですね。でも、活動していくなかで、だんだんとわかってきた感じがします。さまざまな人が出会うことができる場所、会いやすい環境整備というのもありますよね。自分のなかには、さまざまな立場の人がいて違うのが当たり前なんだ、という考えがあるのですが、アートポイントは、いろいろな人が混じり合っているのが当たり前という状態になっている。そういう雰囲気がすごくいいなと思っています。

アートの世界は「ある」ということを肯定してくれるというのが、不思議で良い面なのかなと思っています。

和田　小学生の頃から「手話とは何か？」と問われることがありました。でも、わたし自身もその問いにうまく答えられないし、すごく違和感も感じていたんです。だからこそ、そうした何かが蓄積されていく場があれば、手話ってなんだろうと興味を持った人がそこに入って来たときに、「あ、こういう空間なんだ」「こういう文化があるんだ」と、その人の身体を通して感じることができるのではないかと思っています。

　アートの歴史は、その人が世界をどうやって見ているか、ということに対して、肯定、尊重するという考え方がベースになっていますよね。もしかしたら他の分野では否定されるかもしれないことでも、アートの世界は「ある」ということを肯定してくれるというのが、不思議で良い面なのかなと思っています。

媒介となる芽を育てていくこと

和田　「めとてラボ」として何かを企画・実施したとき、それを媒介に誰かがその場にやって来て、そこで誰かと誰かが繋がる。そして、またそこから何かが生まれてくる。そうやってどんどん関わりや企画が膨らんでいくんだな、ということを実感しています。

　そして、その媒介となるものは、そこまで強くなくてもいい。なんというか、芽が出たというようなことでもいいんです。何かアイデアが生まれたり、やってみたいという想いだったり、そうした媒介となる芽が、集まってきた人を通して育まれていく。

　いままで自分がクリエイターとして活動し、つくってきたことと、「めとてラボ」から生まれてくるものは少し違うところがあるなと感じています。「めとてラボ」の体験を通して、自分のなかでアートの持つ力、アートの意味が更新されたような感じがするんですよね。言語や身体、文化、これまでの歴史、個々の歴史を共有しているからこそ、繋がっていけることがあるんだなと。その気づきは、すごく自分自身の力になっていますね。

　それから、いままで見えなかったことがだんだんと見えるようになってきた、という喜びもあります。大きな歴史、社会、メディアなどのなかでは見つけてこれなかった生活や文化というものを、「めとてラボ」の活動を通して、自分で発見することができる。これは、メンバーそれぞれにとっても、すごく良い気づきになっているのかなと思います。

根本　わたしはもともとアートと全く関わりがありませんでした。知っていたとしても、手話ポエムや手話語りといった、ろうコミュニティのなかで注目さ

れてきたものだけでした。和田さんに導かれるようにアートの世界に出会って、最初はわからなかったけれど、だんだんと、これまで自分たちが生きてきた文化とアートがフィットするな、うまく調和していけるなと思いました。自分たちの文化とアートを照らし合わせてみる。そこから新しいものが生まれてくる、というようなイメージかな。

さっき「栄養」という言葉が出ましたが、お互いに栄養を与え合うことで、これまで見えなかったものが見えてくるのではないかと思っています。
「めとてラボ」を通して、まだ表には出ていなかったものごとが現れ出ていく。それをろう者だけではなく聴者も含めて、育み、膨らませ、それぞれに還元されていくことで力になっていくのではないかなと思います。

和田　もうひとつ大切だと思っているのが、「目」と「手」から手話の世界や文化の語り方、伝え方に取り組むということです。手話を文字や書記言語で表そうとしても翻訳しきれないものがたくさんありますよね。でも、アートの世界では、その翻訳しきれなさというところを補い、触れることができるのではないかと思うんです。そして、そこから新たなコミュニケーションの方法や遊びが生まれていくというのが、すごくいい面だなと思っています。

根本　手話の世界を見てもらえるって感じですかね？

和田　一緒に見るという感じですね。

根本　つまり、いままで社会のなかで見られてこなかったものを一緒に見るということですか？

和田　例えば、手話の世界について、書記言語で残された記録物があったとして、でも、それを見てもよくわからないと思われていたものでも、アートを介して一緒に見ることで、「あ、こういうことなんだ」と知ってもらえるという感じかな。

小山　「めとてラボ」を介して、いままで繋がっていなかったものが繋がったり、見えなかったものが見えてきたり、関わる人たちや活動のなかでそうした相互作用があって、どんどんとプロジェクトが広がっているんだなと感じました。

それはやはり、メンバーがそれぞれに自分の持っているものは何か、自分が感じていることは何かということを出し合って、考えながらゆっくり進めているところがあるからなんでしょうね。そこが「めとてラボ」の特徴なんだと思います。

めとてラボのこれから

小山　最後に「めとてラボ」の今後の展望について教えてもらえますか？

一人ひとりのなかにある考えや表現、
アイデアなど、さまざまな芽吹きを喜んで、
大切に育てていく場でありたいし、ずっと続けていきたい。

和田　これまでの歴史を踏まえても、マイノリティは、活動していくために常に闘ってこなければなりませんでした。それはとても重要なことだと思います。でも、そればかりだと苦しいとも思うんです。

「めとてラボ」は、一人ひとりのなかにある考えや表現、アイデアなど、さまざまな芽吹きを喜んで、大切に育てていく場でありたいし、ずっと続けていきたい。「あ！こんなところに新しい芽がある」というように、自分のなかから出てきた芽を大切に、安心して育める場所にしたいですね。もっと言うと、東京だけではなく、全国各地の人々とも共有し、どんどん育てていくというのが理想だなと思っています。

根本　そうですね。明確にこれを目指すという具体的なイメージがあるわけではないんです。でも、何かを遮断するのではなく、探して、見つけて、待って、そして湧き出てきたものを大きく育てていく、そんなイメージを持っています。和田さんの言うように、みんなのなかから出てきたものが育っていくのを見守るというか。「あ！これいいね」「あの人のあれもいいな」というように、お互いに影響を与え合って、そこからさらに広がっていくといいなと思います。それから、自分たちの周りだけに焦点を当てるのではなく、常にアンテナを張っていたいですね。

小山　「めとてラボ」の活動は、これからもどんどん広がっていきそうですね。今後の活動も楽しみにしています。

収録日：2023年7月30日
手話通訳：佐藤晴香、小松智美、蓮池通子

おわりに

新しいことに取り組む現場では、何らかの試行錯誤が求められる。さらにその現場が、異なった背景や文化を持つメンバーによって構成されたとなると、クリエイションに取り掛かる前の準備や調整が必要となる。例えば、メンバーそれぞれの経験や抱えている前提が異なる場合、その違いの存在を互いに知ることからはじまる。「（そのような現場は）試行錯誤の連続だった」と振り返る語りに含まれる濃密な時間を経験者は想像するとしても、一般的には「良い出来ですね」と成果への評価が立って、その舞台裏の「試行錯誤」にまで眼差しが注がれることは少ない。

本書『まず、話してみる。』は、そうした試行錯誤の部分にフォーカスし、制作の舞台裏での顛末（てんまつ）を開示することから学び取る。その企画意図は、マネジメントの更新と言って良いかもしれない。副題にある「コミュニケーションを更新する３つの実践」の現場を対象化し、考察する。いかにしてその現場が生まれたのか。この問いのために、制作チームは本企画の構成を検討し、しかも、その学びを２つのアウトプットにおいて実践する。

座談会は「冊子」（本書のことだ）と「映像」の形式で公開され、「映像」には手話と字幕（文字情報）を付している。制作チームが「本企画は、わたしたち自身が培ってきた経験や知見をあらためて問い直す機会となりました[*1]」と書き記すように、学びと実践が直結する。

座談会で得た経験を自らの実践へと課す。そのプロセスは、３つの実践者への敬意を示し、真摯に学び取ろうとするだけでなく、かれらの経験をよりわかりやすく「知見化」することのチャレンジ（試行錯誤）を楽しんでいるようにさえ映る。かなり手の込んだ仕掛けの企画と実践だが、単に知見のオープンソース化を促進し、横展開を容易にすることだけを目論むものでないことを「まず、話してみる。」のタイトルに託す。

たしかに「はじめまして」から全てがはじまる。３つの実践を解体し、考察した結果、この向き合い方の姿勢こそが肝要であると制作チームが辿り着いた言葉が「まず、話してみる」だったとすれば、このタイトルに託されたメッセージは、３つの事例をなぞることではなく、新たな課題に果敢に取り組む際の初手は「まず、話してみる」ことなのだという、とてもシンプルな行動指針であると言える。だからといって、それはそれほど簡単なことではない。ものごとはそれほど単純ではないからだ。

「自分とは異なる他者」との新しいマネジメントのあり方が求められている理由は言うまでもない。本書の「はじめに」の冒頭に「誰もが互いの価値観や個性を尊重し合い、ともに生きていく社会の実現を目指す」と記されているように、このアウトカムを実現するためには、さまざまな分野でのアクセシビリティや情報保障に関する活動が求められる。このような社会的要請のなか、アーツカウンシル東京が実践する取り組みを検証するのは「隗（かい）より始めよ」の精神といえるものだ。だが、同じ組織にいながらも当事者でないとわからないことも多い。

その部分を仲間、関係者の距離で聞く。課題がどこにあったのか、どのように解決したのか。課題をクリアした先に見えたこと。それらの知見をオープンソース化する。事実、「TURN」では、アクセシビリティを考えた映像制作の現場に立ち会い、その舞台裏を担当者によるレポートとして記録した[*2]が、事業終了時には、情報保障の取り組みを含め映像配信をする場合にどのような項目が必要で、その項目が必要とする理想的な手間数と必要となる訳を明記した「仕様書」の雛形を共有する（オープンソース化する）ことの意義、必要性を感じていた。

仕様書の新しい項目がもたらす必要とする手間隙（てまひま）、着手する前の対話の時間、企画が意味するところの核心をとらえ機材を手配する。あるいは通訳や出演者の立ち位置一つ取ってもコーディネートが必要になることなど、その場に遭遇しないとわからない問題が常に現場にあることを体験する。その体験を、経験として共有する。関わる人々の暗黙知となるレベルにまで溶け込むには、まだまだ多くの人の手による試行錯誤が必要となる。

「３つの実践」は取り組みの一例でしかない。共創社会の実現は、このような取り組みの一つひとつが積み重ねられてはじめて実現できるものだろう。だからこそ、今日も隣りにいる人々と「まず、話してみる」ことからはじめたいと思う。そのために必要なことは「隣りにいる人々」にまず、気づくことかもしれない。

アーツカウンシル東京 事業部事業調整課課長
森司

*1　本書 p.2「まえがき」より
*2　『TURN JOURNAL SPRING 2022 — ISSUE 08』p.110-118, 畑まりあ（アーツカウンシル東京）, 2022年発行
https://turn-project.com/timeline/output/15844

謝辞：本企画に関わっていただいたみなさまに、厚く御礼申し上げます。

企画：櫻井駿介、小山冴子
編集：嘉原妙［冊子］、齋藤彰英［映像］
アートディレクション・デザイン：蔭山大輔
執筆：嘉原妙［座談会］、櫻井駿介［事業概要］、森司［おわりに］
座談会収録：齋藤彰英
座談会スチール撮影：小笠原彩
座談会収録アシスタント：高口聖菜

手話講座 座談会収録
実施日：2023年8月25日
ゲスト：河合祐三子、瀬戸口裕子
モデレーター：嘉原妙
通訳：伊藤妙子［担当：河合］、山崎薫［担当：瀬戸口］、新田彩子［担当：嘉原］

TURN / Creative Well-being Tokyo 座談会収録
実施日：2023年9月27日
ゲスト：畑まりあ、二瓶剛
モデレーター：櫻井駿介
通訳：瀬戸口裕子［担当：畑］、加藤裕子［担当：二瓶］、石川ありす［担当：櫻井］

めとてラボ 座談会収録
実施日：2023年7月30日
ゲスト：根本和徳、和田夏実
モデレーター：小山冴子
通訳：佐藤晴香［担当：根本］、小松智美［担当：和田］、蓮池通子［担当：小山］

——

Tokyo Art Research Lab は、東京アートポイント計画の一環として運営しています。
東京アートポイント計画は、東京都・アーツカウンシル東京・NPO が協働し、社会に新たな価値観や、人々が自ら創造的な活動を生み出すための「アートポイント（拠点／場）」をつくる事業です。当たり前を問い直す、課題を見つける、異なる分野をつなぐ —— そうしたアートの特性をいかしたアートプロジェクトを通じて、わたしたちの暮らすまちに、個人が豊かに生きるためのよりよい関係や仕組み、コミュニティが育まれることを目指しています。

主催：東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
——

まず、話してみる。
コミュニケーションを更新する３つの実践

発行日：2024（令和６）年３月15日
発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
〒102-0073 東京都千代田区九段北４丁目1-28 九段ファーストプレイス５階
ISBN 978-4-909894-50-2 C0070

営利、非営利を問わず、当資料のコンテンツを許可なく複製、転用、販売など二次利用することを禁じます。 © Arts Council Tokyo

tarl
TOKYO ART RESEARCH LAB

ARTS COUNCIL TOKYO